2008年度

「鶴岡セミナー」報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

2008 年度
「鶴岡セミナー」報告書

Contents

はじめに　2

「鶴岡セミナー」の概要 …… 3

鶴岡セミナーについて　*4*

1. はじめに
2. 鶴岡セミナー開催にいたる経緯とセミナーの趣旨について
3. 鶴岡セミナーの目的
4. セミナーのテーマ
5. 合宿セミナーの概要
6. セミナー・プログラム

鶴岡セミナー現地発表会　*10*

鶴岡セミナー特別企画「土の土方と水滴の時間」　*12*

グループ・プレゼンテーション…… 15

第 1 グループ「庄内で感じる生と死―死がもたらすエネルギー―」　*16*

第 2 グループ「鶴岡に学ぶ生命～自然の中に見る、いのちのかたち」　*23*

第 3 グループ「即身仏の「生」を活かす」　*31*

鶴岡セミナー活動報告会　*41*

資料編…… 43

はじめに

教養研究センター所長
横山千晶（法学部教授）

現代は「批評家」の時代です。テクノロジーの発達のおかげで自宅にいながらにして世界中とつながることができます。情報はたちどころに目の前に現われます。少ない時間でいかに多くの情報を手に入れるかどうかはもはや過去の話でしょう。代わって数ある情報をどのように取捨選択をしていくのか、どの情報が信頼するに値するかどうかを瞬時に見抜く力が重要なスキルになりつつあるのです。学問の世界でも現状は同じでしょう。他人の意見を吸収する肺活量の大きさでは負けない人間が学問の世界や教育の世界にもごまんといます。いわゆる批評家はうようよしています。しかし、立ち止まって咀嚼し、十分に吸い取ったものを吟味し、自分の味わいをつけてあらたな空気を吐き出すことのできる人間はいかに少ないことでしょう。それは「ゆとり」の問題ではありません。与えられた時間は結局同じことの繰り返しに無駄に使われるだけですから。

皆この危機感は十分に感じているのです。でも動き出すのは実に難しい。この報告書で紹介するひとつの試みはそんな世の中の急流にあえて棹差して、流されることなくまずその流れの中にとどまって、押し寄せる強さを身に感じてみることから始めた小さな抵抗です。やり方は非常に簡単。まずここから出てみる。人に会ってみる、話してみる。一緒に食べてみる、しかも味わって食べてみる。歩いてみる、しかもまわりを見ながら歩いてみる。そのときに息してみる、しかも味わって息してみる。学ぶ、しかも随時考えながら問いかけながら学ばせてもらう。教えてもらう、生きている人から、そして死んでいる人から。

そして、生きてみる。生きていく。心と体と頭の全身を使って自分自身で。この実感プログラムが「鶴岡セミナー」です。

今回の「家出のススメ」の先が庄内であったのは、その文化の深さ、自然の烈しさ、人々の懐の深さ、そして過去・現在・未来をつなぐその時間軸の野太さが私たちのことを丸ごと受け入れてくれたからにほかなりません。厳しくも美しい自然にときに脅かされ、ときにおおらかに迎え入れられ生きてきた庄内の人々の心と体と頭は、今この場で自らが生きることだけに終始していたわけではありません。彼ら・彼女らが生きること、つまり死に向かうことは、そのまま自分たちを取り巻く人々、そして自分たちの後に来る者たちの生きることにつながっていました。この先見は、慶應義塾大学が創立 150 年を迎えて掲げたモットー、「未来への先導」にもつながります。ただ、人々にとってそれは「先導」ではなく、ごく日常の一部だったのではないでしょうか。この庄内の日常的な感覚を若い人たちに「わかったつもり」ではなく、実感して欲しい。鶴岡セミナーの願いはそこにあります。

まだまだ小さな一歩です。しかしこの小さな一歩がやがてよりよく学びよりよく生きる大きな道を作っていくのです。そして道はさまざまなところへとつながっていくことでしょう。この小さな一歩を手助けしてくださった関係者の皆さまに心から感謝いたします。そして、これからの道のりをどうぞ温かく見守っていただけるように、皆様にお願いする次第です。

2008 年度「鶴岡セミナー」報告書

「鶴岡セミナー」の概要

鶴岡セミナーについて

1．はじめに
2．鶴岡セミナー開催にいたる経緯とセミナーの趣旨について
3．鶴岡セミナーの目的
4．セミナーのテーマ
5．合宿セミナーの概要
6．セミナー・プログラム

鶴岡セミナー現地発表会

鶴岡セミナー特別企画「土の土方と水滴の時間」

鶴岡セミナーについて

羽田　功（鶴岡セミナー・プロジェクトリーダー／経済学部教授）

1. はじめに

慶應義塾大学教養研究センターは、2008年度に第一回鶴岡セミナーを開催いたしました。
鶴岡セミナーは、2008年7月30日のプレ企画を皮切りに、8月31日から9月3日に山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を中心として実施された合宿セミナーをメイン企画として、11月15日に慶應義塾大学日吉キャンパスで行われた活動報告会にいたるまで、ほぼ半年にわたって行われました。

ここでは、このセミナー開催にいたる経緯と趣旨、セミナーの目的、セミナーのテーマ、セミナーの概要運営組織、セミナーのプログラムについてご紹介したいと思います。

2. 鶴岡セミナー開催にいたる経緯とセミナーの趣旨について

(1)「知の共同体」としての大学
―鶴岡セミナーを支える理念

慶應義塾大学教養研究センターでは、2005年度から2007年度にかけて、文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究センター」プロジェクト「バリアフリー･キャンパス構築をめざして」を展開してまいりました。これは21世紀型の教養教育の慶應モデルの作成を目指したプロジェクトです。

プロジェクトでは、教養教育のあり方を抜本的に見直し、学ぶべきコンテンツと学びの場とを併せて、受け継ぐべきは受け継ぎ、正すべきは正し、生み出すべきは生み出すことに留意しつつ、新たな教養教育を総合的に捉えた全人教育プログラムを構築してきました。プログラムのキーワードは5つ：

①「知の共同体」―大学とはさまざまな構成員によって「知」をめぐるダイナミックな活動が行われる「共同体」です。そこでは相互に教えあい、学びあう関係、つまり、半学半教の関係が構築されなければなりません。
②「バリアフリー」―こうした共同体の活動と構成員の関係をより有意なものとするためには、しかし、まず大学自体が、またその構成員があらゆるものに対してバリアを設けることなく、これに接することのできる姿勢を持たなければなりません。バリアからの解放が求められる所以です。
③「自律性」―知の共同体では半学半教、相互啓発といった学びが重視されますが、これが実現するためには、何よりも共同体の構成員一人ひとりが「学ぶ自分」「教える自分」を相対化して眺める視点を持たなければなりません。自己を、他者を、共同体そのものを俯瞰する目が必要です。このような自律性の涵養は共同体の大きな課題です。
④「社交力」―共同体における活動は協働作業が基本となります。つまり、他者とどのようにつながるか、そのつながり方が活動の成否を決めるわけです。そのためには、当然のことながら他者とつながり、共に活動を展開するための力が必要とされます。
そうした社交力を育むことも不可欠です。
⑤「ポートフォリオ」―共同体において学んだこと、教えたことをただそのままに置いておくのではなく、これをポートフォリオとしてしっかりと記録し、ファイル化することで、過去を振り返り、現在を見つめ、未来を構想するための宝箱にしなければなりません。これは生涯にわたって個人が「よりよく生きる」ための貴重なアーカイブの役割を担うものです。

(2)「未知」と出会う・「未知」を知る
―鶴岡セミナーの趣旨

私たちが作成したプログラムにおいて特に重点を置いたのが「身体知」でした。すなわち、とかく座学に傾きがちな学びを、実際に身を以って体験する

ことで身に染みこませること、また座学だけでは学ぶことの難しい分野・領域を実体験することの重要性を強く意識しています。

慶應義塾の抱える三田、日吉、矢上、信濃町、湘南藤沢、芝共立キャンパスあるいは丸の内シティキャンパスは首都圏に集中しており、学生たちは学びに関わる多くの時間をこれらのキャンパスで過ごしています。もちろん、慣れ親しんだキャンパスにおいて充実・集中した生活を送ることの意義には大きなものがあります。しかし、慣れ親しむがゆえに、ふと見落としてしまう大切なものがあるかもしれません。首都圏のキャンパスは、そうした見落としを再発見することや見慣れたものの中に新たなものを発見するための学びの場だと言えるでしょう。

と同時に、日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びのフィールドを広げることも教養教育には欠かせない要素であると考えます。その環境を与えてくれるのが鶴岡にほかなりません。残念ながらとりわけ学生たちの間での鶴岡キャンパスの認知度は高いとは言えません。だからこそ私たちは鶴岡に注目いたしました。日吉や三田のキャンパスを離れて、出羽三山を背後に控え、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた鶴岡キャンパスをフィールドに、存分に心と体と頭を使いつくすプログラムを学生たちに体験させることが鶴岡セミナー最大の目的です。

また、セミナー参加者として、さまざまな世代にまたがる慶應義塾の卒業生や地元の学生・市民が加わることで、普段経験することのできない活発な「知」の世代間交流の場を作り出すことを目指してもいます。

かつて鶴岡藩の藩校「致道館」では、学習者一人ひとりの天性に応じた長所を伸ばすために、詰め込み型の知識学習を排して自学自習を重要視した徂徠学を基盤に置いた教育が行われていました。社交力と共に自律的学習者の育成を目指す本研究プロジェクトは、そうした「致道館」の歴史を持つ鶴岡においてセミナーを開催することに大きな意義を見出しています。ここからは、必ずや新しいダイナミックな「知」の活動が誕生してくるはずです。これこそが「鶴岡セミナー」の趣旨にほかなりません。

3. 鶴岡セミナーの目的

以上のような経緯とセミナーの趣旨をもとに、私たちはセミナーの目的を以下の３点に設定いたしました。

◇日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びの場を広げるために、出羽三山を背後に控え、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた鶴岡キャンパスをフィールドに、存分に心と体と頭を使いつくすプログラムを体験します。
◇セミナー参加者として、さまざまな世代にまたがる慶應義塾の卒業生や地元の学生・市民が加わることで、普段経験することのできない活発な「知」の世代間交流の場を作り出します。
◇セミナーで使用される教材ならびにセミナーで生まれる成果を広く発信するために「慶應義塾”Great Works”・鶴岡版」を作成します。

なお、このうち最後の「慶應”Great Works”プロジェクト・鶴岡版」については、若干の補足説明をさせていただきたいと思います。

［補足説明］

鶴岡セミナーの中核をなす合宿セミナーは４日間という限られた時間の中で行われますが、そこでは文字や図像・図版・映像などによる教材と共に鶴岡や荘内に見出すことのできる多様な教材を積極的に用いていくつもりです。すでにある貴重な伝来の文化知財や自然教材にとどまらず、セミナーを通じて新たな教材の発見も期待しております。さらにはセミナー自体から新しい成果も生み出されてくるはずです。

私たちは、こうした教材をただセミナーだけのために期間限定で活用するものとは考えておりませんし、セミナーの成果もセミナー内部にだけ閉じ込めておくべきものとも考えていません。むしろ、これらの教材や成果を後世に伝えるべき貴重な文化遺産として、また教育･研究に大いに活用すべき有用な知財として位置づけ、慶應義塾が認定する”Great Works”として広く社会に提示していくことを考えております。これが「慶應”Great Works”プロジェクト・鶴岡版」です。

プロジェクト自体はまだ立ち上っておりませんが、

今回の鶴岡セミナーをその第一歩としたいと思います。選定・活用方法・保存・公表の方法などについては今後の検討課題ですが、慶應義塾関係者にとどまらず、鶴岡市や地元の市民、企業、研究教育機関など、鶴岡セミナーにご協力いただける方々と共に作業を進めていく予定です。また、その結果は慶應義塾大学出版会を通じて刊行・発信していくつもりです。

4. セミナーのテーマ

鶴岡セミナーでは、総合テーマと基調テーマ、そして年度ごとのテーマを設定しています。総合テーマはセミナー全体を包み込む大枠です。鶴岡・庄内において、とりわけ「生命」に焦点をあてたセミナーであることを物語るものとして設定しています。これに対して基調テーマは、「心と体と頭と」を存分に使い尽くして「学び」の場を広げることを意識して、「行動する教養」あるいは「教養する」ことを強調しています。セミナーの土台を示すテーマです。そして、年度ごとに鶴岡・庄内からさまざまなテーマを選び出したものが年度テーマです。これが参加者たちにとってはグループワーク、プレゼンテーションの実質的な課題となります。すなわち—

◇総合テーマ:『鶴岡に学ぶ「生命(いのち)」—心と体と頭と—』

鶴岡を中心とした日本海・庄内平野・出羽三山が織り成す小宇宙とその歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、慶應義塾において進められている「生命」に関わる多様な研究・教育の成果をも取り入れることで、「生命」を総合的に考えることを趣旨としたテーマです。

◇基調テーマ:「知る・見る・表現する—行動の教養学入門」

◇ 2008 年度テーマ:「生命の源—死を想い、生きることを考える」

具体的には、羽黒修験と即身仏を選び、講義とフィールドアクティヴィティによる学びを経験しました。

5. 合宿セミナーの概要

セミナーのメイン企画である合宿セミナーの概要は以下の通りです。

◇期間:2008 年 8 月 31 日〜 9 月 3 日(3 泊 4 日)

◇場所:慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス・東北公益文科大学大学院ホール・鶴岡市・出羽三山

◇参加者構成:講師・学生(大学院生を含む)・社会人・教職員スタッフ・コメンテーター

◇参加者数:講師 5 名・慶應義塾大学学生 12 名・東北公益文科大学学生(含む大学院生)9 名・社会人(慶應義塾大学卒業生)1 名・コメンテーター 5 名[2008 年度実数]

◇宿泊場所:旅館「月山荘」

6. セミナー・プログラム

すでに記した通り、鶴岡セミナー全体は、プレ企画・合宿セミナー・成果報告会の 3 部構成となっています。次にそれぞれにプログラムの詳細をご紹介します。

なお、同時開催され、大きな関心を呼び起こした特別プログラム「命の実感プログラム:土の土方と水滴の時間」については別に扱っています。

◇鶴岡セミナー・プレ企画　7 月 30 日(水)

・13:00 〜 14:00:事前説明会(慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1F103・104 号室)

合宿セミナー参加者に対するセミナー詳細についての説明を行いました。東北公益文科大学からの参加者に対しては、テレビ会議システムを利用して日吉キャンパスと TTCK を結んでの説明会となりました。また、ここで合宿セミナーにおける 3 グループのメンバー発表をしました。

・14:20 〜 16:30:映画『蝉しぐれ』上映会(来往舎 1F シンポジウムスペース)

合宿セミナー慶應側参加者・一般学生・教職員・塾員・地元市民・社会人を対象とした一般公開企画としました。慶應義塾大学通信教育部夏期スクーリングの時期と重なり、通信教育部の学生も多く参加してくれました。

・16:45 〜 18:00:講演会(来往舎 1F シンポジウムスペース)

映画上映に引き続いて、『蝉しぐれ』のプロデューサーでもある宇生雅明氏(庄内映画村株式会社代表取締役社長・映画「蝉しぐれ」プロデューサー)を

お招きして、「山形庄内地方の魅力と庄内映画村の活動」をテーマにご講演いただきました。

◇鶴岡セミナー　8月31日(日)～9月3日(水)
セッションⅠ：全体学習＝一般公開
【8月31日（日）】
　合宿セミナー参加者は各自で直接会場に集合しました。慶應義塾大学関係の参加者と東北公益文科大学側の参加者はここではじめての顔合わせとなりました。初日のプログラムは以下の通りですが、すべて一般の方にも公開しました。セッションⅠの参加者は70名程度で、盛況のうちに合宿セミナーが始まりました。

14:00　現地（TTCK・東北公益文科大学大学院ホール）集合・メンバーの顔合わせ
14:30　開会・セミナーの趣旨説明
14:45　ご挨拶　富塚陽一氏（鶴岡市長）
15:00　特別企画「土の土方」オープニング講演
　・テーマ:「土　―生命（いのち）育むもの―」
　・講師：辻孝二郎氏（INAXライブミュージアム　土・どろんこ館　館長）
15:30　特別企画「土の土方」スタート（TTCK健康管理室）
15:40　セミナー基調講演1
　・テーマ：「鶴岡・酒田－公益の小宇宙」
　・講師:小松隆二氏（東北公益文科大学教授）
16:40　セミナー基調講演2
　・テーマ：「知る・見る・書く―行動の教養学入門」
　・講師：坂上弘氏（作家・日本文芸家協会理事長）
17:40　質疑応答
18:10　セッションⅠ終了（その後、TTCK内 レストラン「百けん濠」にて懇親会）

セッションⅡ：「生命の源―死を想い、生きることを考える」
【9月1日(月)：フィールド･アクティヴィティ①】
　いよいよ合宿セミナー参加者だけによるセッションが開始されました。現場体験を行う「フィールド･アクティヴィティ①」のテーマは羽黒修験。修験道と即身仏（ミイラ）信仰に詳しく、写真家としても素晴らしい作品を持つ東北芸術工科大学の内藤正敏先生の熱のこもった講義と晴天のもと空気の匂いを胸一杯に吸い込みながら羽黒山の二千数百段に及ぶ階段を登りながら修験の現場を辿る1日でした。秋の峰入りが終わった直後でもあり、荒沢寺ではまだ温もりが残っていそうな柴灯護摩の痕跡に触れることもできました。

【コンセプト】
即身仏の成立と信仰は、江戸期の食と餓えの問題と切り離せません。そして現在もなお、「飢餓」をめぐる根源的な欲望・希望・絶望が形になった〈生命の痕跡〉として、凄みと聖性を持って即身仏は見る者に迫ってきます。即身仏に食の問題を読み解くことは、我々自身の内部にある生命の感覚と欲望を省察し、現代世界が内包する、生命をめぐる問題の所在を明確化することでもあります。食と即身仏の関係は、将来どのような道を志すにせよ、宗教･経済･政治・社会・芸術・歴史記述を取り込んだ総合的なテーマとして、皆さんに回答を迫らずにはおかないはずです。

左から富塚陽一市長、辻孝二郎氏、小松隆二氏

出羽三山神社

07:50　TTCK 集合
08:00　講義①開始　講師：内藤正敏（東北芸術工科大学教授・写真家）
10:00　講義①終了
10:20　TTCK 出発
11:00　正善院黄金堂見学
12:00　随身門→羽黒山五重塔→出羽三山神社斎館（昼食）→羽黒山山頂→出羽三山歴史博物館
15:00　羽黒山荒沢寺見学
16:00　荒沢寺出発
17:00　月山荘着
19:30　講義②開始　講師：内藤正敏氏
21:30　講義②終了

【9月2日（火）：フィールド･アクティヴィティ②】
「フィールド・アクティヴィティ」の2日目は即身仏がテーマです。初日と同じく内藤先生の講義を聞き、続いて本明寺の秘仏たる本明海上人の即身仏と森敦の「月山」の舞台として有名な注連寺の鉄門海上人の即身仏を拝ませていただきました。若い参加者たちにとってはなかなかに衝撃的な体験だったようで、二人の上人の即身仏はあらためて生と死の意味を深く考える格好の契機を現代の若者に与えてくださったようです。

内藤正敏氏

なお、休業日にもかかわらずわざわざ店を開け、地場の野菜をふんだんに使った料理を出してくださった知憩軒の美味な昼食、これも別の意味で参加者には衝撃だったようです。また、鶴岡市立郷土資料館では、羽黒山信仰を中心に、古くは江戸時代にまで遡る資料を見せていただきました。プレゼンテーション用の資料として活用できる文献も数多く用意していただき、参加者は書架とコピー機の間をさかんに行き来していました。

08:00　TTCK 集合
08:30　講義③（90分）　講師：内藤正敏氏（東北芸術工科大学教授・写真家）
10:30　TTCK 出発
　・見学先：本明寺（秘仏）および注連寺
14:00　注連寺出発（途中、知憩軒にて昼食）
15:00　鶴岡市立郷土博物館到着・資料検索
・以後、翌朝までグループ・ワーク―プレゼン準備

セッションⅢ：プレゼンテーション＝一般公開
【9月3日（水）】
ついに合宿セミナー最終日です。3グループともほとんど徹夜でのプレゼンテーション準備となりました。教員スタッフも深夜時折部屋を巡回しながら、進捗状況を確認したり、議論に加わったりと、合宿最後の晩に相応しい（？）光景が展開されました。
プレゼンテーションは一般に公開しました。参加者数は100名近くにのぼりました。それぞれの発表に対しても、フロアから鋭く、時に厳しい質問が投げかけられたり、コメンテーターの皆さまからの温かいコメントやアドバイスをいただいたりと、会場に集った全員で充実した時間を共有することができたと思います。
08:50　TTCK 集合
09:00　グループ･ワーク―プレゼン最終準備

注連寺

09:30　開場
10:00　開会
10:05　プレゼンテーション開始（1グループ20分＋質疑応答10分）
11:35　コメンテーターによる評価・アドバイス
富塚陽一氏（鶴岡市長）
黒田昌裕氏（東北公益文科大学 学長）
小松隆二氏（東北公益文科大学 教授）
酒井天美氏（財団法人 致道博物館 常務理事）
坂上弘氏（作家・日本文芸家協会理事長）
12:00　特別企画講演とディスカッション
・テーマ：「土方巽と衰弱する生」
・講師：森下隆氏（慶應義塾大学アートセンター訪問所員）
12:40　セミナー閉会　黒田昌裕氏（東北公益文科大学学長）
（その後、「百けん濠」での昼食会を経て現地解散）

◇第一回鶴岡セミナー活動報告会　11月15日（土）

第一回鶴岡セミナー活動報告会は、慶應義塾大学日吉キャンパス・リサーチ・ポートフォリオ（HRP）の一環として、以下の要領で開催されました。9月3日の鶴岡でのプレゼンテーションをもとに、参加者たちは2カ月半ほどの時間を使いながら、東京と庄内という空間的な障壁を乗り越えて、グループとしてそれぞれの研究を深めてきました。その最終成果の報告会です。この活動報告会は一般にも公開され、HRP来訪者や慶應義塾の教職員、学生、一貫教育校の生徒など、80名近くの参加者を集めました。

東北公益文科大学側の参加者は前日夜までに日吉キャンパスに新築されたばかりの協生館の宿泊施設に入り、早くも慶應義塾側の参加者と再会を喜び合うと共に、あらためてグループとしての最後の仕上げ作業に入りました。

当日のプレゼンテーションは、各グループの特徴を活かした方法・形式で行われました。内容的にもそれぞれに夏の成果を踏まえつつ、それを深化させたもので、会場の関心と感心を十分に引き起こすに足りるものであったと思います。フロアとの間で交わされた活発な質疑からもそれを窺うことができます。また、コメンテーターの方々からも、さまざま観点から建設的なご意見をいただくことができ、セミナーの幕を閉じるに相応しい心良い緊張感に満ちた報告会となりました。

・場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1Fシンポジウムスペース
・報告会プログラム：
14:00　開会・主催者挨拶
14:10　来賓挨拶
14:15　鶴岡セミナー紹介
14:45　グループプレゼンテーション
14:50　第1グループ「庄内で感じる生と死―「死」がもたらすエネルギー」
15:10　質疑応答
15:30　第2グループ「鶴岡に学ぶ生命―自然の中に見るいのちの形」
15:50　質疑応答
16:10　休憩
16:20　第3グループ「即身仏の「生」を生かす」
16:40　質疑応答
17:00　コメント
酒井忠久氏（財団法人 致道博物館 館長）
酒井天美氏（財団法人 致道博物館 常務理事）
後藤赳司氏（出羽三山山岳宗教研究所 主幹）
中本佳孝氏（財団法人 簡易保険加入者協会財務部長）
大歳恒彦氏（東北公益文科大学 公益学部長）
白 迎玖氏（東北公益文科大学 准教授）
18:00　閉会（その後、懇親会を経て解散）
・来賓：高坂信司氏（鶴岡市役所企画部企画調整課）
阿部知弘氏（鶴岡市東京事務所）

鶴岡セミナー現地発表会

横山千晶（教養研究センター所長／法学部教授）

2008年9月3日(水)の10時より、12時40分まで東北公益文科大学鶴岡キャンパス、大学院ホールにて、8月31日から始まった鶴岡セミナーの現地成果報告会が開催されました。当日は地元住民やメディア関係者による総勢100名近くにのぼる参加者を前に、東北公益文科大学と慶應義塾大学の学生たちが、3日間に学んだこと、考えたことの発表会を行いました。プロジェクト・リーダーの慶應義塾大学経済学部教授羽田功による開会の言葉に引き続き、慶應義塾大学理工学部教授小菅隼人の司会のもと、3つのグループがそれぞれ15分間、パワー・ポイントを使いながら発表を行い、その後各15分間、活発な質疑応答が交わされました。最後に5名のコメンテイター（鶴岡市長富塚陽一氏、致道博物館常務理事酒井天美氏、日本文芸家協会理事長坂上弘氏、東北公益文科大学教授小松隆二氏、東北公益文科大学学長黒田昌裕氏）からのコメントを頂戴しました。成果報告会後、慶應義塾大学アートセンター訪問所員の森下隆氏による特別企画講演「土方巽と衰弱する生」が行われ、12時40分に羽田氏の閉会の辞をもって発表会は盛況のうちにその幕を閉じました。

「庄内で感じる生と死―『死』がもたらすエネルギー」(第1グループ)、「鶴岡に学ぶ生命」(第2グループ)、「即身仏の生を感じる」（第3グループ）という各グループのテーマが物語るように、参加学生たちは講義とフィールド・ワークの双方を通じて鶴岡セミナーの総合テーマ、「鶴岡に学ぶ『生命(いのち)』―心と体と頭と―」に、自らの心と体と頭を使って向き合ったのです。今回の3つの発表は、その体験の中間報告会であり、2ヵ月後の11月には慶應義塾大学日吉キャンパスで最終報告会が開催されます。中間報告会で学生たちは自由な想像力を働かせ、夜を徹して話し合った内容を率直に述べ、その若い感性が大いに会場の参加者を刺激しコメンテイターの指摘も含め、活発な意見交換が展開されました。その様子は地元のメディアでも取り上げられたとおりです（資料編を参照のこと）。特に評価されたのは、最終報告会に向けてのこれからの研究の展望です。第1グループは今回の特別企画「土の土方」に見られる死へと向かう生、死と再生の祭り、松例祭、そして即身仏を例にとって生を際立たせる死の存在を語りましたが、命の尊厳が軽んじられる現在の死生観との関係をこれから調査するという抱負を述べました。第2グループは公益・死生観・自然の3つの要素が庄内の文化を支えているとしながら、庄内の文化に見られる公益的な視点の基礎と庄内の修験道の特異性を探りたいと述べました。第3グループは過去・現在・未来という時間軸の意識、他人との関係性、自分で意思決定を行う自立性の3点に集約できる「生」の定義と即身仏とを結びつけ、生と死が分裂して考えられてしまっている現代の死生観をどのように正していったらよいのかという積極的な介入の方法について模索したいとしました。

報告内容とこれからの展望に対して、会場から賛同と同時に積極的なアドバイスがもたらされました。コメンテイターからもさまざまな資料の紹介や提供、具体的なアドバイスを受けることができました。富塚市長は、仏教だけでなくキリスト教をも含めて異なった信仰がこの地で受け入れられ、人々が昔からこの地で「生きること」そのものを真剣に見つめてきたことを指摘されました。酒井氏は、セミナー参加者の感性の鋭さを高く評価すると同時に、庄内の豊かさに貢献した一般の人々の暮らしにも注目してもらいたい旨をお伝えになりました。坂上氏は学生たちの柔軟な思考力と想像力を評価しつつ、その想像力を調査やコミュニケーションでサポートしていくことの重要性を説かれました。小松氏は忌避しがちな「死」というテーマに真っ向から切り込むセミナーのテーマそのものを評価し、学生のみならず聴衆の立場としても、考える課題を与えられたという感想を付け加えられました。黒田氏は、過去の人々の生きた証の中に現代の私たちが学ぶことが大いに

あることを改めて強調されました。このように、更なる文献調査や聞き取り調査、および庄内の文化の根底を探りつつ、現代と過去を結びつけるという大きな課題を受けて中間報告会は終了しました。これから各グループとも庄内と関東に分かれて協力し合いながら、文献調査を行い、その最終成果は改めて11月15日（土）に披露されることとなります。

鶴岡セミナー特別企画「土の土方と水滴の時間」

鶴岡セミナー特別企画「土の土方と水滴の時間」統括
小菅隼人（慶應義塾大学理工学部教授）

この企画は、生まれた瞬間から衰弱を経て死に至る道筋を歩み続ける生命の実感プログラムとして、慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス健康管理室に設置した土と泥で造られた土方巽像の上に、土像が崩れるまで、3日にわたって昼夜一定間隔で水滴を落とし続けた特別展示です。土の塊を崩していく一粒一粒の水滴の落下は、私たち生ある者の鼓動の連続と死を受容する運命的な時間を感受させ、特にその場に立ち会う若い学生達に、生と死を圧縮した異質な時間を体験させることになりました。

土方巽は、1950年代終わりから80年代初めにかけて、「暗黒舞踏」を標榜して世界に類をみないダンス表現を実現した、日本のアヴァンギャルド運動の代表的な芸術家です。この土の像のポーズは、土方巽の代表作である「疱瘡譚」（1972年）という作品の中で使われたものです。この作品で、土方巽は、より美しいものであることをひたすら目指してきた芸術理想を逆転させました。すなわち、ひび割れた皮膚をもって、体を痙攣させ、大地を這いずり回る醜い人間の姿を、全く立ち上がらない踊りとして表現したのです。このような土方巽独特の美学は、生まれ故郷である東北を舞台にして、人間の生を、死の側から考えようとした結果生まれました。普段、私たちは、死体を醜く嫌悪すべきものと考えます。しかし、土方巽は、死は、直面する者に、迫力と凄みを持って圧倒的な存在感で迫ってくるということを実感し、それを暗黒舞踏という形で表現しようとしたのだと思います。当時まだ小学生だった私はこの作品を直接観てはいませんが、写真と記録映像によってさえ圧倒され、震えるほどの感動を覚えます。1975年、土方の薫陶を受けた弟子たちは鶴岡市内に稽古場を設立し、鶴岡グラン･カメリオにおいて「北方舞踏派結成公演」を行っています。土着の民俗と死生観に強い影響を受けていた土方は、晩年、「衰弱体」を提起して、生命を死と重ね合わせて見ようとする芸術思想に到達しました。「衰弱体」の思想は、まさに、今回のセミナーのテーマにも、即身仏を生み出し羽黒修験の里でもあるこの鶴岡にも直結しているのです。

この土像の制作にあたっては、小菅を総合統括、森下隆慶應義塾大学アートセンター訪問所員を制作ディレクターとして、実際に土方の舞台制作にかかわった彫刻家の吉江庄蔵氏の協力のもとに、10人ほどのメンバーからなるチームを立ち上げました。2008年2月よりミーティングを重ね、東京で骨格を作りこんだ後、材料と共に鶴岡まで運び、セミナーが始まる直前の1週間をキャンパス内に泊まり込んで最後の仕上げにあたりました。最も困難だったの

は、このプロジェクトのコンセプトが、古代彫刻のように3000年存在しつづける石像を作ることではなく、3日で壊れる土像を作るという点にありました。つまり、3日間で「きちんと」崩壊する素材とフォルムが必要だったのです。その素材の選択については、世界的なタイルメーカーであり、まさに土の専門家集団である、愛知県常滑市のINAXライブミュージアム「土・どろんこ館」の全面的な協力を仰ぎ、素材の選択、水滴実験、そして土そのものの提供もいただきました。INAXライブミュージアム「土・どろんこ館」の辻孝二郎館長、また、今回のプロジェクトの直接担当者である、チェ・ゼブン氏には、常滑より鶴岡まで、わざわざいらしていただき、土についての特別講義もいただきました。

さらに、この崩壊の映像制作と送信にあたっては、慶應義塾大学デジタルメディアコンテンツ統合研究機構「ポートフォリオBUTOH」（リーダー：小菅、http://note.dmc.keio.ac.jp/butoh/）と連携し、設置を含めた全過程の記録を映像として残し、さらに、東京の慶應義塾大学三田キャンパスに高精細映像を伝送し、かつ、インターバル録画をウェッブサイトによって全世界に配信しました。また、この模様は、庄内の様々な場所を定点観測してたいへん興味深い映像を配信している庄内ライブカメラ（http://www.tele-sp.co.jp/live/）のサイトでも流されました。これらのアウトリーチ活動によって、このプロジェクトは予想以上の反響を呼び、鶴岡セミナー関係者のみならず、ウェッブサイトによって初めてこの企画を知った専門の研究者からも多くの反応がありました。例えば、前国際演劇学会会長で、モントリオール在住のジョゼット・フェラール女史からは、“The installation of “Earthen Statue of Hijikata” was of particular interest to me. The whole concept is very interesting and striking, …” というメールをいただき、求めに応じて詳しい資料をお送りしました。このプロジェクトは、地域、企業と連携しつつ、まさに、教育活動としても、研究業績としても、この鶴岡セミナーという形のプログラムでしか成し得ない成果があげられたものと自負しています。

Special program for realizing the life:
INSTALLATION “Earthen Statue of HIJIKATA”

About this installation

HIJIKATA Tatsumi, the founder of BUTOH, pursued in 1960s destructive and violent expression, but in 1970s he focused on imperfect body – bodily expression of disease and aging. Then in his last years, HIJIKATA conspire to a concept “a body dying”. Its practice in dance field is to choreograph a dance according to an imagery – slowly-dying and decaying body of himself is looked at by alter ego. For this, HIJIKATA was interested in SOKUSHINBUTSU (mummy), that slowly approaches death. And many of SOKUSHINBUTSU is found in Tsuruoka, where this project is held.

HIJIKATA Tatsumi in Story of small pox. Photo: ONOZUKA Makoto

The project “Earthen Statue of HIJIKATA” aims at objectifying HIJIKATA’s interest and expression. In this project, we produce earthen statue and at the same time demolish it. To express the dying (=collapsing) body, water will be dropped on it bit by bit during the seminar and finally the statue will be fallen. People witnessing the falling statue will have extraordinary experience where life and death cross over each other. It must give them opportunity to think about the essence of life. In addition, the process of falling will be recorded with all the time in HD quality. It would take 3-4 days for the statue to fall. When it’s completely fallen, the camera stops. The video from camera will be transmitted to the world in real-time, thorough WWW. People around the world experience at one time, extraordinary /ordinary time regarding to LIFE and DEATH.

This program can be viewd at:

INTERNET (webcasting)

http://www.ustream.tv/channel/butoh (the view of installation)

http://www.ustream.tv/channel/butoh-subcamera (relevant lectures, behind the scenes)

Quicktime Broadcaster (requires Quicktime)

http://www.dmc.keio.ac.jp/butoh/butoh.qtl

HD quality video

Keio University (Mita, Japan) DMC labo, 9.1-9.3 12:00-18:00 (9.3 10:00-12:00)

http://www.dmc.keio.ac.jp/

Photographs (SHONAI Live camera)

http://www.tele-sp.co.jp/live/

2008年度「鶴岡セミナー」報告書

グループ・プレゼンテーション

2008年11月15日（土）に活動報告会が開催され、鶴岡セミナーの最終成果を各グループが発表しました。当日の発表原稿ならびにパワーポイントのスライドを掲載します。

第１グループ「庄内で感じる生と死―死がもたらすエネルギー―」

Gr.1 ８名	市村　謙（慶應義塾大学法学部）	松下里沙子（慶應義塾大学文学部）
	伊藤弘了（慶應義塾大学法学部）	曽塚　円（慶應義塾大学文学部）
	田澤輝明（東北公益文科大学公益学部）	奥山あゆみ（東北公益文科大学公益学部）
	高橋　要（東北公益文科大学公益学部）	國井美保（東北公益文科大学大学院）

第２グループ「鶴岡に学ぶ生命～自然の中に見る、いのちのかたち」

Gr.2 ７名	吉野雄大（慶應義塾大学医学部）	米村友希（慶應義塾大学文学部）
	宮城　輔（慶應義塾大学経済学部）	森崎美希（慶應義塾大学法学部）
	高橋宏市郎（東北公益文科大学公益学部）	吉田優子（東北公益文科大学公益学部）
		山口千明（慶應義塾大学卒業生）

第３グループ「即身仏の「生」を活かす」

Gr.3 ７名	鈴木昂太（慶應義塾大学文学部）	杉　祐実（慶應義塾大学文学部）
	森　智也（慶應義塾大学法学部）	漆原万里子（慶應義塾大学看護医療学部）
	船山博道（東北公益文科大学公益学部）	成澤美貴（東北公益文科大学公益学部）
	佐藤一広（東北公益文科大学大学院）	

第1グループ

庄内で感じる生と死
―死がもたらすエネルギー―

市村　謙／伊藤弘了／松下里沙子／曽塚　円／奥山あゆみ／高橋　要／田澤輝明／國井美保

1. イントロダクション

これから第1グループの発表を始めさせて頂きます。1班のテーマは「庄内で感じる生と死―死がもたらすエネルギー―」です。このテーマの由来として、まず「感じる」という言葉を入れたのは、普段の授業とは違い、フィールドワークを通して五感で吸収したものを大切にしたい、という想いがあったからです。そして、この「死がもたらすエネルギー」という副題についてですが、そもそも皆さんは「死」についてどのようなイメージをお持ちでしょうか。皆さんそれぞれ自分の考えをお持ちでしょうが、“「死」＝すべての終わり”と考える方は多いのではないでしょうか。実際、私たちもそうでした。しかし、このセミナーでの経験を通して、“「死」＝すべての終わり”ではなく、「死」は何らかのエネルギーを持つものではないかと考えるようになり、最終的には「死」の持つエネルギーに焦点をあてたテーマで研究を進めていくことにしました。

では、こちらが今回の発表のアウトラインです。まず、鶴岡セミナー最終日に行われた中間報告会から2ヶ月あまり経過した現時点までの過程を「中間報告会から最終報告会」で説明し、次に「即身仏と現代の自殺」、そして「松例祭と食物連鎖」、最後に「まとめ」という順序で進めさせて頂きます。

まず、中間報告会での報告から最終報告会に至るまでの過程についてですが、前回の報告会で私達は、セミナーの講義やフィールドワークを通して感じたことといった体験中心の発表を行いましたが、この最終報告会では、その発表により学術的なアプローチを加えようと、グループで話し合い、論を深めてきました。その結果、「即身仏」「松例祭」の2つの具体例を通して死の持つエネルギーについて考えていくことにしました。具体的には「即身仏」の論では精神的観点を、「松例祭」の論では「食」という肉体的、物質的観点を導入して考察していきました。それでは、これら2つについて、1つずつ論じていきます。

2. 即身仏と現代の自殺

まず即身仏についてですが、簡単に説明しますと、即身仏とは、修行者が土中に入り、瞑想状態のまま絶命しミイラ化したもののことです。単純に考えると自殺行為であるこの即身仏の行ですが、多くの場合、即身仏の行は自殺とは捉えられていません。それは一体なぜなのでしょうか。

私たちは現代の自殺と比較することによって、自殺と即身仏修行の持つ性質の違い、そしてその死の意味に迫っていきました。

1）現代の自殺

ではまず、現代の自殺について説明します。自殺という「死」を選ぶ要因を調べていくと、経済的問題や親子問題、学校問題などその背景はさまざまですが、その多くは

・人生の目標を見失った。そんな自分は何のために生きるのか分からない。
・何もかもが嫌になった。
・こんなにも生きるのがつらいのならば、死んだほうがましなのではないか。

といったものではないでしょうか。

つまり、ここで強調しておきたいことは、現代の自殺志願者は生きる意味を見失いがちであること。そして、生きる意味を強く、また明確に持っていないが為に、最終的には死という選択肢を選ぶことで現実逃避し、自分自身を楽にするのだということです。これは現代の自殺の多くは簡潔に言うと、「生きる意味を見失い、苦悩から逃れようとする行為」であるといえるのではないでしょうか。

では、現代の自殺志願者が「生きる意味を見失った者」とするならば、即身仏志願者はどのような人達なのか。このことについて次に論じます。

2）即身仏

私たちは即身仏になる行は自殺行為ではあるが、現代の自殺とは本質的に異なるものと考えています。なぜならば、そこにあるものは「煩悩からの逃避」ではなく、「目的のある死」に他ならないからです。即身仏とは、簡単に言うと、行者が土中に入り、瞑想状態のまま絶命しミイラ化したものです。彼らは土の中に入る前に、木の皮や木の実を食べることによって命をつなぎ、体の余分な肉や水分を削ぎ落とし、生きている間にミイラの状態に体を近づけます。そして、節をぬいた竹で箱と地上を繋いで空気の確保をし、読経をしながら死ぬまで鈴を鳴らします。この土中入定は、死を「死ではなく永遠の生命の獲得」とする考えがありました。私たちはこの鶴岡セミナーを通して即身仏と庄内の歴史を学ぶうちに、即身仏の行には強い衆生救済の思想があることを学びました。まず、こうした即身仏が生まれた要因に、異常な飢饉や重税による過酷な社会背景があったことに注目したいと思います。

天保年間を例にあげて説明します。この時代は連年のように凶作が打ち続きもっとも厳しい時代であったといわれています。大凶作におののく人々の祈願をこめてたくさんの行者が競い合うように山に籠もっていきました。つまり、これは即身仏になって現存する上人の背後に無数の即身仏予備軍がひかえていたことを示しています。このように、山籠や土中入定などには衆生救済の思想が強くあったことが伺えますが、木食行や断食もまた同じ意味をもっていたと考えられています。ここで、木食行で食べる木の実や野草が飢饉食だったという事実に注目してみます。たとえば、本明海上人が入定前に5ヶ月間食べたとされる松の皮は、とても人間の食べ物とはいえない代物でしたし、木食行の主食ともいうべき木の実も、いくら味がよいとはいっても主食にするとしたら全く話は別になります。行者は「生命をつなぐために最低限のエネルギーのみを提供する」飢饉食を常食にすることで木食行をしました。飢饉のときに人々を救うために飢饉食を取り、木食行や断食をして一心に祈願する一世行人たちの姿は、どんなに高尚な思想や荘厳な宗教儀式よりも、飢えた人々の心の支えになったことは言うまでもないでしょう。飢えた人々のために自らの肉体を飢餓化して祈ることこそ、一世行人の行なった木食行の本質的な思想だったのです。

また、土中入定の思想そのものにも衆生救済の思想が強くみられます。それは焼身往生や入水往生と比較してみると明らかでしょう。焼身往生や入水往生に稀薄な他者救済の思想が、土中入定には強くみられるのはなぜでしょうか。内藤正敏先生の著書『日本のミイラ信仰』[1] では、その答えとして「死の美学」について言及されています。焼身往生の、「天をこがす美しい紅蓮の炎がもつ極楽浄土の光明なイメージ」や、「水底の龍宮など美しい他界のイメージ」をもつ入水往生はどちらも「瞬間の死」であるといえ、まさに極楽へ死に急ぐ往生者にはふさわしい死

1）内藤正敏『日本のミイラ信仰』，法藏館，1999年

に方でした。それに対して土中入定には、暗黒の冥界を思わす土や、その中で長い年月をかけ屍が腐っていくといったおどろおどろしいイメージがつきまといます。このように土中入定のような地下の暗黒の中での孤独な死は、自分が極楽往生できるといった自己の救済だけではとても耐えられるものではありません。他の人を救いたいという精神的な強い支えがあったからこそ、このような長い死の恐怖に立ち向かえたのです。

「自殺」と「即身仏の行」にたいして、ここまで説明してきたことをまとめると、現代の自殺志願者は「生きる意味を失った」者であるのに対し、即身仏志願者は「死ぬ意味を知っていた」者であるということができます。仏教の思想に「自己の死が愛となって他者へ向けられ、再び生へと転換されていく」というものがあります。私たちは鶴岡セミナーのフィールドワークを通して、死が終わりではなく、強いエネルギーとなって生きている人の精神的支えになると考えました。即身仏という「死」は当時の人々に「生きるための精神的なエネルギー」を与えたのです。

3. 松例祭と食物連鎖

次に、松例祭について論じていきたいと思います。前回の報告会での内容を改めて深めていく中で、松例祭には「食」というキーワードが関わっているのではないかと考えました。では、まず「松例祭とは何か」について説明させて頂きます。

松例祭というのは、羽黒山で行われる祭事の中でもっとも重要とされるもので、「そ乱鬼」と呼ばれる鬼をかたどった大松明を中心として神事が進められていくものです。大松明で作られたそ乱鬼は負の象徴で、12月31日の午後2時にいったん切り刻まれて殺されます。夜になると力を取り戻して生き返りますが、除夜の鐘の直前に再び焼き殺されます。年を越えると松打ちという奇怪な格好をしたものが現れますが、これはそ乱鬼が生まれ変わったものだと言われ、浄火を振りまいて災厄を除去します。内藤先生の著書である『鬼と修験のフォークロア』[2]のなかに、松例祭は「稲の祭り」だということが書かれています。松例祭の中では、祭事中に一般の参会者にふんだんに握り飯が振舞われ、豊作・豊漁を願うための験くらべなど、食べ物に関する事柄が多数見られます。祭りのメインとなるのはそ乱鬼ですが、実は祭りの中には食べ物に対する人々の思いが込められているのではないかと考えました。

また、修験の中には霞という言葉がありますが、霞とは羽黒山の信者圏のことだそうです。よく、仙人は霞を食べるといわれていますが、実際は霞を食べるわけではなく、霞に住む農民からあがる米を食べて生きているのです。羽黒修験では霞は今も財産権として売買されるなど、羽黒修験が稲を中心とする食を大切に扱ってきたことがわかります。

食というものは、生物の生と死に大きく関わるものです。松例祭や羽黒修験はそういった食に対する思いが表れたものだと私たちは考えます。私たちは前回の鶴岡セミナーで「つながる死」というものを感じました。しかし、単純に考えてみると、つながる死とは食物連鎖という形で古代から幾度となく繰り返されてきたものだったのです。自然界においては、弱いものは強いものの食料となり、一番強いものの死骸は土に返りまた弱いものを生み出す源となります。そうやって何かの死は何かのエネルギーとなっていくのです。これが人間においては、誰かの「死」が誰かに「生」を考えさせるきっかけとなったり、誰かの尊い「死」が誰かを勇気付けるエネルギーに変わったりするのです。

松例祭においても、そ乱鬼の死は死のままで終わらず、年を越して松うちとなることで人々の災厄を除去します。そうやって死は死のままで終わることなく、何かしら別の形で連鎖していくのです。そして、その生と死は食物連鎖や食糧不足からの衆生救済の思い、豊作を願う人の食べ物に対する思いなど、食というものに深く関わってつながっていくのではないでしょうか。

このように松例祭について調べていくなかで、次の生物の血肉となって新たな生命が繋がっていく食物連鎖という枠組みのなかに「肉体的・精神的につながる死」を見出すことが出来ました。

2) 内藤正敏『鬼と修験のフォークロア』，法政大学出版局，2007年

4. まとめ

続いて、今回の発表のまとめを行います。

まずは、即身仏についてです。一見すると、現代の自殺と変わらないようにも思える即身仏信仰ですが、両者は根本的に異なるものでした。たしかに、自己救済的な側面は、自殺・即身仏双方において見られましたが、それに加えて、即身仏信仰には、衆生救済の願いが込められていました。この点で、「生きる意味を失った」結果である現代の自殺と、「死ぬ意義を知った」即身仏信仰とでは、決定的な違いがあると言えます。このような即身仏信仰は、飢饉にあえぐ民衆に生きるエネルギーを与えており、そのあり方は「精神的につながる死」という考え方を体現しています。

続いて、松例祭についてです。そ乱鬼の死と、その松打ちとしての再生を描くこのお祭りのあり方自体がすでに、「つながる死」のイメージを含んでおり、それに加えて、松例祭には、「食」にたいする強い想いが託されていました。私たちの日々を支える「食」と、その総体としての食物連鎖の世界のあり方からは、一個体の死が他の個体の命を支える「肉体的につながる死」のイメージを読み取ることができます。

最後に、今回のセミナーを通して私たちが得た結論として、「死の持つ二面性を浮き彫りにした」点を強調しておきたいと思います。もう一度、私たちが冒頭にしたのと同じ質問を繰り返します。みなさんは「死」についてどのようなイメージをお持ちでしょうか。今までにそんなことを考えたことはなかったという方や、以前の私たちのように、“「死」＝すべての終り”と考えていた方の中には、もしかしたら、この発表を聞かれて考えを変えた方もいる

かもしれませんし、もしそうであれば、私たちとしても嬉しく思います。もちろん、「死」には「負」の側面があります。しかしながら、同時にまた、「正」（生）の側面をも合わせ持っているのです。即身仏、松例祭にそれぞれみられた精神的・肉体的な「死」のエネルギーは、相互に補完し合いながら厚みを増し、庄内の地に、連綿と繋がる生と死の物語を描きだしているのです。

以上で、第１グループの発表を終わります。ありがとうございました。

参考文献
内藤正敏『日本のミイラ信仰』，法藏館，1999 年
内藤正敏『鬼と修験のフォークロア』，法政大学出版局，2007 年
警察庁「平成 19 年中における自殺の概要資料」
http://www.npa.go.jp/toukei/chiiki10/h19_zisatsu.pdf

庄内で感じる生と死

～「死」がもたらすエネルギー～

市村　謙
伊藤　弘了
田澤　輝明
高橋　要
松下　里沙子
曽塚　円
奥山　あゆみ
國井　美保

1

アウトライン

- 中間報告会から最終報告会
- 即身仏と現代の自殺
- 松例祭と食物連鎖
- まとめ

2

中間報告会から最終報告会

・フィールドワークを通して
・即身仏・松例祭と「死」

→学術的なアプローチ
→現代との比較

3

即身仏と現代の自殺

即身仏とは？

- 修行者が土の中に入り、瞑想状態のまま絶命し、ミイラ化したもののこと。

4

現代の自殺

自殺

＝煩悩からの逃避

＝自己救済

『読売新聞』、夕刊、2008年6月19日、一面総合

5

即身仏①

- 庄内地方-江戸時代
- 衆生救済のため自ら土中入定し、断食死してミイラ化した行者

→死ではなく永遠の生命の獲得
＝自己救済（弥勒信仰）

6

即身仏②

■飢餓に苦しむ民衆の救い
ー 厳しい社会背景の中での木食

ー 「死の美学」
焼身・入水往生→瞬間の死
土中入定→長期にわたる死の苦しみ

⇒他者救済という精神的な支え

7

即身仏と現代の自殺

■ 現代の自殺
→生きる意味を失った

■ 即身仏
→死ぬ意義を知った
➡ 精神的につながる死

8

松例祭と食物連鎖

9

松例祭とは

■ 羽黒修験の祭事
■ そ乱鬼（大松明）を中心に展開
■ そ乱鬼は斬殺→焼殺
■ 年が明けると「松うち」として復活
■ 「松うち」は浄火で災厄を除去

http://kankolog.jp/shonai/event/p0094.html

10

松例祭・羽黒修験

■ 稲の祭り
■ 握り飯が振舞われる
■ 豊作・豊漁を願う「験くらべ」
■ 霞と呼ばれる信者圏からあがる米を食べる
■ 霞は財産権として売買される

➡「食」を重んじる

11

「食」

■ 生物の「生と死」に大きく関わるもの

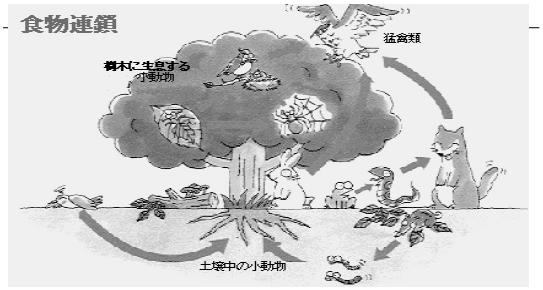
■ 松例祭と羽黒修験は人間の「食」に対する思いが形となったもの

■ 「つながる死」→「食物連鎖」

12

庄内で暮らせと言ー「死」がもたらすエネルギーー

食物連鎖



- http://www.shiretoko.go.jp/kyoshitsu/kiso/tamentekikino/tamentekikino.html

13

庄内で暮らせと言ー「死」がもたらすエネルギーー

「生」と「死」と「食」

■「食」
→飢饉下の人々の食べ物に対する思い
⇒「生」と「死」に深く関わる

食物連鎖
→次の生物の血肉となって受け継がれていく
➡肉体的・物質的につながる死

14

まとめ

■ 即身仏
民衆に生きるエネルギーを与える
→精神的につながる死

■ 松例祭
食物連鎖でつながる世界
→肉体的につながる死

15

まとめ

■「死」の持つ二面性
「負」の側面
↓
「正（生）」の側面
＝精神的・肉体的「死」の持つエネルギー
→連綿と繋がる生と死の物語

16

第2グループ

鶴岡に学ぶ生命
～自然の中に見る、いのちのかたち

吉野雄大／米村友希／宮城　輔／森崎美希／高橋宏市郎／吉田優子／山口千明

今回の鶴岡セミナーでは羽黒山や即身仏を実際に体験し、自然といのちとのつながりを感じました。羽黒という大きな自然とその中に身を投じる人間模様を通じて日本古来のいのちの原点を探り、現代の日本が失ってしまった日本人的感覚に迫りました。

私たちは庄内に広がる自然、特有の概念である公益、即身仏の異様なまでの存在感に触れ、中心となっていのちを支える自然、公益、死生観の３ファクターを見出しました。私たちは、単にこの３つは柱のごとく下からいのちを支えるだけでなく、お互いが関連し合っていると考えます。まさに自然、公益、死生観が調和をとり、いのちのバランスをとっているのです。

1. 自然

もとより日本には古くから東洋の思想として陰陽五行説があります。自然界のすべてのものは陰陽または木火土金水の五行に配当されます。その中で陰と陽、木火土金水がそれぞれ関連しあいバランスをとることで自然を成り立たせているという考え方です。これらのファクターのうち、１つでも欠如や過剰が発生すると自然はバランスを崩し荒れます。春ならば木行、夏ならば火行、土用は土、秋は金、冬は水といったように季節、方角などが五行に当てはまりますが、実際に体に置き換えると臓腑や感情も五行に配当されていて、それぞれが関連性を持つことで体を健康に保っています。

さて、この陰陽五行説が取り入れられていると考えられる事例として、羽黒山で行われる松例祭があり、古くからの東洋の思想を以て松例祭について考察し、羽黒山で行われる人間模様に着目しました。松例祭は９月20日に始まり、大晦日から元旦にかけてクライマックスを迎えます。陰陽学説的に考えると元旦に向かって陰が徐々に増大していきます。そして、増大した陰が極限に達する大晦日に麤（そ）乱鬼が現れます。麤乱鬼は陰を象徴するような存在です。しかし、麤乱鬼は元旦を迎える前に殺されます。そして、年明けを迎えると殺されたはずの麤乱鬼は松打として再生します。ここで陰陽学説を用いると元旦という時点は前年に極限まで達した陰が一気に陽に転化する瞬間であると考えられます。そのため元旦に再生していた松打は陽を象徴する存在であることが分かるのです。次に松打は厚揚げ、じゃがいも、人参、こんにゃく、昆布からなるサシグシを食べます。ここで厚揚げは黄色、すなわち大地を表し、じゃがいもは水、人参は火、こんにゃくは風、昆布は空を表すとされています。再生したばかりの松打は陽に転化したばかりなのでまだ陽気が少ない状態です。この状況を打開するために松打は自然の力をバランスよく持ったサシグシを食べることで調和のとれた自然の気を取り入れているのです。このように多因子が複合的に作用しあうことでいのちを自然な状態に保つことができるのです。

もう一度元旦という時点の意義に視点を戻すと、それまで陰の極限の麤乱鬼だった松打がきれいに

なって生まれ変わってくることから、松打の再生は人間の本性に還った姿であると考えました。つまり元旦には上述のような年の変わり目や陰陽の転化という切り換えの意味だけでなく、死から生への転換、本来あるべき姿に還るという意味も持ちます。このようにして昔の人々はいのちと自然、死生観のつながりを感じていたのです。

さらに西洋の自然観と東洋の自然観を対比してみると、ヘブライズムに代表されるように西洋では唯一絶対の神が人間も自然もすべて創造したとされ、人間優位な世界を形成したように思われます。ここでは人間が自然をコントロールしていくように見えます。一方、東洋では陰陽五行説や心身一如という言葉があるように、自然と人間が調和して生存しています。いのちも自然の一部であり、自然とともに生きている共生や公益の観念が生まれます。

修験や羽黒における人間模様を考えると人の死生観を考えざるを得ません。また人と自然の関わりにおいては公益という概念が生じてきます。江戸時代以前では修験者が自然の植物や鉱物を用いて医療に携わっていたこともあり、自然と人との結びつきは強くお互い助け合える公益という現代の概念にもつながっており、さらにそこへ修験者が関与していたことも興味深く思われます。　　（文責：吉野雄大）

2. 公益

フィールドアクティビティーの一環として、鶴岡セミナー２日目、９月１日に私たちは羽黒山に登りました。登山中に案内人である先達から私たちは衝撃的な事実を聞きました。その事実とは、羽黒山は植林による人為的自然であるということでした。それはまさに私たちにとって未知のものでした。ある種のショックを受けたと同時に、「調和・バランス」というキーワードが思い浮かびました。つまり、そこに人間と自然との健全な関係が示唆されているような気がしました。

また、この登山の前日に、東北公益文科大学前学長である小松隆二先生による講演が行われたのですが、その講演では21世紀は公益の時代だということが強調され、公益のキーワードとして「調和」という言葉が挙げられていました。

そこで私たちはこの登山と講演から、羽黒山と公益に関係性があると考え、羽黒山にも公益という概念が存在するのではないかと考えました。ここからは羽黒山を公益的な視点で検証したいと思います。

ところで、そもそも公益とは何か。公益の定義から始めたいと思います。先ほども紹介しました小松先生は公益学の第一人者であるので、先生の著書での公益の定義を紹介したいと思います。公益とは、ニーズ、サービス、そしてソーシャルの３つが揃って初めて成立するものだと定義されていました。ただし、ここでのソーシャルとは社会性という意味ではなく、公共性という意味です。では、羽黒山におけるそれら３つの概念は何にあたるのかを次から見ていきます。

まず、羽黒山におけるニーズとは何か。それは争いと飢饉の終焉だったと考えられます。当時の人々は争い、飢饉や自然災害などの危機にさらされてその終焉を求めていたと考えられます。また、これらの危機は調和のバランスが崩れている象徴的な現象ととらえることが出来ます。つまり、争いとは人と人の調和が崩れた現象であり、飢饉や自然災害は人と自然の調和が崩れた現象だととらえることが出来ます。

次に、ニーズを解決するための非営利的なサービスが出てきます。そのサービスは植林による羽黒山の神聖化や石段の造成です。こうして、羽黒山に関心を向けさせたり、また人々の心の拠り所として作り上げたりすることで争いを解決しようとしたのです。言い換えると、人と人の調和を回復したのです。また、人と自然との調和をどう回復したかというと、それは羽黒山によって人と自然との関係の在り方を示したことです。つまり、人と自然とのうまい調和の仕方の一例として羽黒山を位置づけたのです。

最後に、ソーシャルですが、これは不特定多数の人々が公平な豊かさを享受できるということだと考えます。この不特定多数という言葉は時代すら越えています。時代を越えて現代の私たちですら登山をする際にサービスを享受できたのです。以上の検証から、羽黒山にも公益という概念が存在すると言えると思います。

また、先ほどの考察から、公益と生命が密接に関わっていることが見えてきました。調和が保たれつつ人と人、人と自然とは互いに支えあって生きているのです。そうやって相互に支えあって生きていきながら命をみんなで繋いでいくことがまさに生命と言えるのではないでしょうか。その意味で公益とは、「生命」であり「生きること」と考えることができると思います。

以上のことをまとめると、公益に一貫するものがあります。それは、日本人の自然観とつながってくる調和やバランスです。また、公平性であったり、思いやりや自分を超えることであったりすると思います。不特定多数の他者に非営利的なサービスをすることはやはり自分を超えることが必要があると考えられます。公益によって、現世で善行を積むこと、また自分を超えることは即身仏とつながってくる考え方だと思います。　（文責：宮城輔）

3. 死生観

まず日本古来からの死生観を説明しますと、自然の巡り巡る循環に逆らわず、共生することを主眼としています。例えば、吉野の説明の中にありました五行説の他、五火説などがあります。これは、死者は月にいったんとどまり、雨となって地に戻り、植物に吸収されて穀類となり、それを食べた男の精子となって、女との性的な交わりによって胎内に注ぎ込まれて胎児となり、そして再び誕生するという考え方です。

まず、即身仏とは、衆生救済のため、厳しい修行の末自らの身体をミイラとしたもの、と定義されて

います。また、日本人の自然観がその死生観を裏付けています。例えば、西洋では自然と人間を完全に分離した考えを持っていますが、日本では人間は自然の一部と考えます。西洋では人の知性は基本的に良きものであり、それによる判断に沿わない自然のあり方は、この判断に立つ限り悪と考えます。例えba
幾何学図形は美しいが、自然界にはそれは見られません。だから人間の能力で幾何学的に自然物を並べて見せたのが西洋風の庭園です。東洋では往々に人間の知性をこざかしいものと見て、天の采配に逆らわない方がよいとの判断があります。したがって、その庭園は自然界の美をできるだけ取り込み、左右非対称、あるいは対称性を少しずらせた配置を基本とします。

即身仏は人々の信仰を集める代わりに箱に収められている限り土にかえることはできません。それでは、自然の循環から離脱してしまった即身仏は、日本の死生観、文化観の中では異端の存在なのでしょうか。人は死んで残すことができる一番確実なものは、他の生物の養分となる有機物です。私たちは死んでも何かの生物の一部となり、それが循環する限り永遠に生きることができます。しかし、即身仏はそれができない。鶴岡で初めて即身仏の現物を見た時に、私たちはそこに畏敬よりも一抹の寂しさ、さらには恐怖を感じました。

しかし、最終的に私たちは一つの結論に達しました。すなわち、自然の循環からかい離した即身仏は、仏教思想の最終目標である解脱と類似しているのではないか、ということです。

解脱とは、誤った執着心から起こる業の繋縛を解放し、迷いの世界の苦悩を脱することを指します。これはすなわち、苦界であるこの世からの脱出であり、輪廻の輪から解放され仏となることを意味します。そして、この解脱は、この世で善行を積むことにより達成されると考えられています。つまり、衆生救済のために我が身を犠牲にするという究極の善行をなした即身仏が、自然の循環の輪から離脱することは、善行を積んだ者が廻の輪から離脱する解脱と類似しており、同時に、仏教思想の解脱を体現していると考えられます。

その即身仏を見る衆生は、解脱の体現を達成し仏となった元人間を目にすることで憧憬を抱き、自分たちも飢饉や干ばつなどで矢継ぎ早に苦境を強いられるこの世界からの解脱を夢見て、善行を積もうと心がけます。これがすなわち、鶴岡独自の観念である公益発展の一端を担うようになったのではないかと考えています。

このようにこれまで探ってきた３つのファクターですが、お互いに補完しつつ関連し合っていることはより明白になりました。この３つは従来の日本には当たり前に存在した考えであるように思えてなりません。現代のより進んだ考えを否定するわけではありませんが、私たちは日本の源流の思考を再評価することで、考え方に幅をもたせ息詰まる現代社会にいくらかの余裕を持たせたいと考えます。

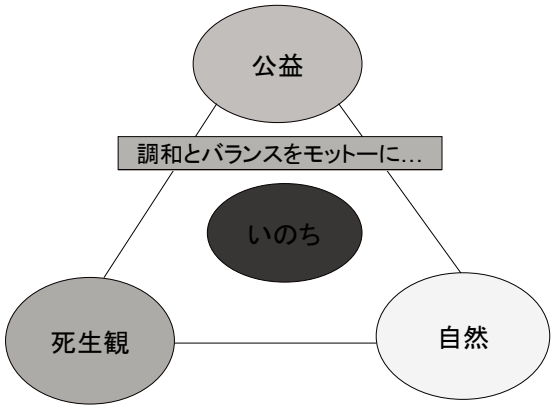
（文責：森崎美希）

鶴岡に学ぶ生命
～自然の中に見る、いのちのかたち～

鶴岡セミナー報告会　於日吉キャンパス来往舎

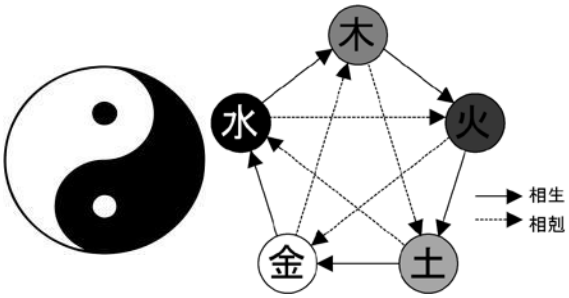
2008年11月15日（土）

1



2

≪陰陽五行説≫

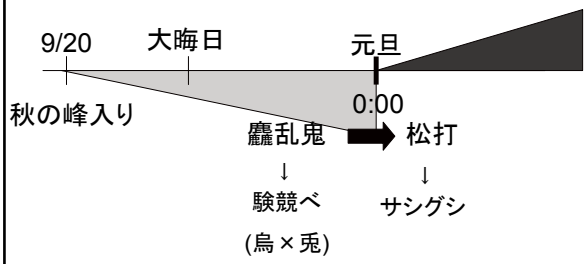


3

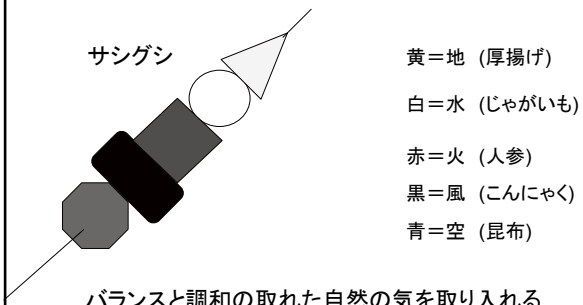
五行	木	火	土	金	水
五臓	肝	心	脾	肺	腎
五腑	胆	小腸	胃	大腸	膀胱
五志	怒	喜	思	悲	恐
方位	東	南	中	西	北
五色	青	赤	黄	白	黒
気候	風	暑	湿	燥	寒
五季	春	夏	土用	秋	冬
五大	空	火	地	水	風
五味	酸	苦	甘	辛	鹹

4

事例；松例祭



5



バランスと調和の取れた自然の気を取り入れる

↓

生命（いのち）は自然な状態を保つ

6

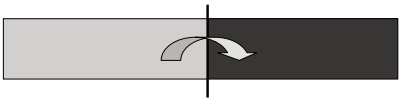
≪自然観の対比≫

西洋	⇔	東洋
ヘブライズム		陰陽五行説
心身二元論		心身一如
人間＞自然		自然＞人間

7

≪元旦という時点のもつ意味≫

元旦(0:00)



- 前の年から明くる年へ
- 陰の極限から陽への転化
- 死から生へ
- 本性に還る

きれいになって生まれ変わる ⇒ 松打

8

≪自然といのちの関わり≫

- 修験道
- 松例祭における麤乱鬼の再生

- 自然もいのちの一部
- 自然によって生かされている
- 自然と共に生きている

死生観　　公益

バランスと調和

9

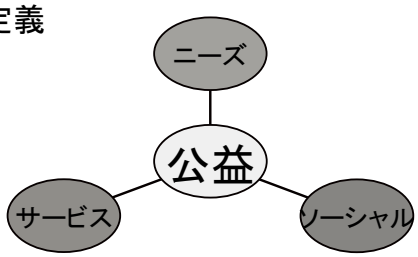
≪五感で感じた羽黒山≫

- 羽黒山の真実
  ⇒ 人為的自然
- 小松隆二先生による講演
  ⇒ 公益の時代
- 羽黒山と公益

10

≪公益とは？≫

- 小松先生の著書における公益の定義



11

≪羽黒山における公益≫

- ニーズ
  →争いと飢饉の終焉
- サービス
  →植林による神聖化、石段の造成
- ソーシャル
  →不特定多数の人々が常に公平な豊かさを享受

12

≪公益と生命≫

- お互いが支えあって生きている
  人と人　　人と自然
  ↓
  命をみんなで繋いでいく
  つまり、生命

13

≪公益に一貫するもの≫

- 調和やバランス
- 公平性
- 思いやりや自分を超えること

⇨ 公益と即身仏

14

≪即身仏とは？≫

衆生救済を願い、厳しい修行のすえ自らの体をミイラにして残した僧。

木食修行…十穀を絶つ
⇩
土中入定…鐘を鳴らしながら
読経

15

≪日本人の思想文化≫

自然のめぐりめぐる循環に逆らわず、共生することを主眼とする。

Ex. 五行説、

五火説（死者は月にいったんとどまり、雨となって地に戻り、植物に吸収されて穀類となり、それを食べた男の精子となって、女との性的な交わりによって胎内に注ぎ込まれて胎児となり、そして再び誕生するという考え方）

16

≪西洋と日本の自然観≫

西洋　　**日本**

自然と人間の分離　　人間は自然の一部

⇔

17

≪即身仏を見た感想≫

自然の循環の中に組み込まれていない即身仏は
日本の思想文化の中では異端な存在？

寂寞・恐怖
⇩

自然の循環から乖離する即身仏は、
仏教思想の最終目標解脱と類似しているのでは？

18

≪身仏の目指す衆生救済とは？≫

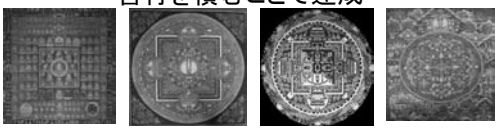
仏教の最終目標＝

解脱…輪廻の輪からの解放

苦界からの脱出

↑

善行を積むことで達成



19

≪即身仏は解脱する≫

即身仏は土に還らない

⇩

巡り巡る自然の循環からの解放

⇩

解脱の体現！

20

≪即身仏と解脱の類似≫

自然の循環	輪廻の輪
⇩	⇩
即身仏	解脱
⇩	⇩
自然の循環からの乖離	輪廻の輪からの乖離

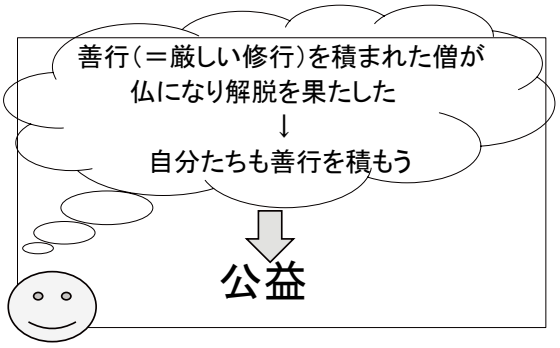
21

≪即身仏を見る衆生≫

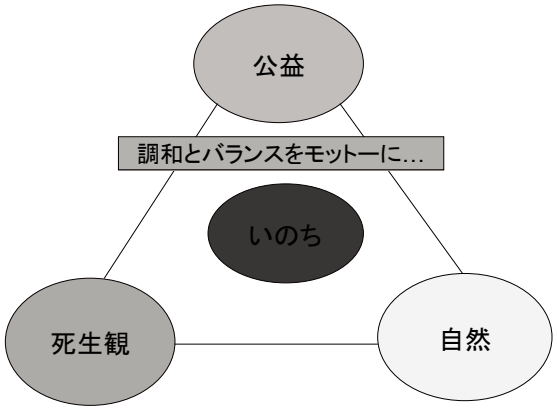
善行（＝厳しい修行）を積まれた僧が
仏になり解脱を果たした
↓
自分たちも善行を積もう

⇩

公益



22



23

第3グループ

即身仏の「生」を活かす

漆原万里子／佐藤一広／杉　祐実／鈴木昂太／成澤美貴／船山博道／森　智也

＊文中（　）内はスライド番号

私たちは夏休みに山形で体験し勉強したことからトピックを見つけ、9月から発展させて参りました。私たち第3グループは、発表タイトルを9月発表時の「即身仏の『生』を感じる」から、今回は「即身仏の『生』を活かす」に変更させていただいたのですが、そのことからも、考えの変遷を感じていただけるのではないかと思います。漠然と体験から受けた印象を語るだけではなく、もう少し踏み込んだ形にしたい、つまり、「即身仏の在り方をどうすれば現代に活かせるのか」ということに焦点をあてた上で、私たちなりの一つの方向性として意見を提示できたらと考えました。もちろん非常に難しいテーマですので、解釈等、様々であるとは思いますが、「まずは自分たちなりに考え、見出してみる」ということも重要だと考えました。私たちの考えやアプローチが少しでも何らかの示唆となり道標となれば幸いです。

1. 即身仏への理解

（1）即身仏とは（3～4）

タイトルにある「即身仏」とは何か。まず一般的な知識として簡潔にご説明したいと思います。

こちらの写真は注連寺の鉄門海上人の即身仏です。私達は山形でこのような即身仏を数体見学し衝撃を受けて参りました。

①定義

この即身仏というものの定義は何かと言いますと、「この生身のままで成仏した人。特に江戸時代、衆生救済のため自ら断食死してミイラ化した行者をいう。」と広辞苑にあり、専門家の内藤正敏先生の著書には「ミイラ化した行者の遺体」という記述があります。

②土中入定

私たちがこれから言及しますのは山形の湯殿山系の即身仏信仰ですが、これでは悟りを開く「入定」を、土の中に埋まる土中入定という形で行います。この方法では基本的に「木食行」と「土中入定」の二段階で行われるのですが、具体的には、1000日以上湯殿山の奥ノ院近くの仙人沢に山籠りをするところから始まります。この間、「ゆるやかな餓死行為」とも表現される、木の実しか食べないような食事制限「木食行」で五穀十穀を断って体内の脂肪や水分を落としていきながら、雪深い寒中でも水垢離をとるなどして、身体と精神を限界まで追い込むような非常に過酷な修行をし続けます。そしてその後に、「土中入定」として土の中に入り、空洞の竹一本を上部に延ばして息つき竹として念仏を唱え、鉦を鳴らしながら死んでいきます。鉦の音が聞こえなくなったら信者が竹を抜き約1000日後には即身仏として発見される、という運びです。想像を絶する修行は、衆生救済を目的とし宇宙と一体化するという悟りを開くための荒行であり、また清めでありながら、一方でミイラ化の合理的な準備でもありました。

（文責：杉　祐実）

（2）即身仏が山形に多い理由（5～6）

①即身仏が多く生まれた庄内の環境

次に即身仏が多く生まれた庄内の環境について説明します。私は今回のセミナーで初めて羽黒山に登ったわけですが、そこには、羽黒山の須賀の滝、五重の塔、延々と続く2446段の石段、その両側には特別天然記念物の杉並木が続いていました。 途中の二の坂には茶屋があり庄内平野を一望でき、山頂には月山神社・湯殿山神社・出羽神社を祭った祭殿があります。現在では、世界遺産にしようという動きもあるそうです。

そんな出羽三山は今日までの1400年余りの歴史の中で、独自の宗教文化を展開し、人々の篤い信仰に支えられ、羽黒派修験道として発展、存続してきました。また、出羽三山の発展・存続には最上川の存在が大きく関わっており、山と川とが一体となり、この地域に信仰と生活が結びついた庄内の地を生んだのだと考えました。　（文責:船山博道）

②なぜ土中入定という形式に至ったか

以上のような環境の中で、即身仏を目指した修験者の多くは修験最下位である一世行人で、彼らの暮らしはとても苦しいものだったそうです。少しでもましな生活を望むなら、山籠りし法力を身につける以外にありませんでした。穀断ち木食行を積みながら、自身の体がミイラ化するのをじっと待つ、このような厳しい修行をなしとげて御神体である大日如来と一体になった、すなわち仏となったのです。大日如来の「大日」とは太陽のことであり、自然の神の象徴的存在と考えられています。湯殿山において、その大日如来と一体となるための供犠が土中入定であったのです。

なぜ土中入定という形式に至ったのかというのは、庄内地方が豊穣であるから、土の中に入り、大自然を感じながら、大地と一体化していくというこの死に方が湯殿山で生まれたのです。

つまり、土中入定は豊穣な庄内地方だからこそ生まれた独特のものなのです。　（文責:成澤美貴）

（3）理念と利害状況の社会学を利用した考察（7～14）

さて次に、即身仏をM.ヴェーバーの理論を使って考察していきたいと思います。彼の歴史・社会に対する見方として、「理念と利害状況の社会学」というのがあります。それによると、「ある宗教意識、現象、および、エートスと呼ばれる人間類型が発生する際には、ある二つの極の相互作用、その絡み合いの中で生まれてくる」としています。その極とは、「主体である人間がおかれている経済や社会、あるいは政治などの外的―社会的な利害状況と人間の個人的な体験や思想などの精神面、人間の内的―心理的な利害状況つまり信仰の二つの極」です。以下では、この理論を元に即身仏信仰を見ていきます。

①一世行人の考察（8, 9）

まず、一世行人、つまり即身仏になる側の考察です。山形で即身仏になった者の出身・階層は、一世行人という寺の中で最下層の地位であり、下男、下僕のようなものでした。その内的な利害状況は、まず心身二元論的に考えると、荒行によって、肉体の面を極限まで縮小し、精神の極み・精神の塊に達することを目標として、厳しい木食行や山籠修行に励みます。そこで修行者は、大いなる力、大日如来であったり、弥勒、もしくは、もっと素朴な大地、山の持つパワーを感じる、またはそれと一体化するための器のようなものになっているといえると思います。また、一世行人たちが修行したところは、湯殿山という聖山であり、世俗の世界とかけ離れた畏怖の対象である山中他界です。それゆえ、そこで修業する一世行人たちは、一層畏れ多い存在と思われていたでしょう。このようにして、ものすごいパワー、呪術的な力を得ることが、一世行人の信仰における内的な利害状況であったと考えられます。

そして、一世行人の置かれていた社会的な状況を見ていくと、以下（スライド9）のようなものになっています。これをまとめてみると、死ぬための大義名分が非常に見つけやすい、きわめて特殊な状況におかれていたことがわかります。修行に励み、ものすごいパワーを得て、民衆の信仰を集めるようになるか、厳しい修行に耐えられなくなり挫折するか。すなわち死ぬかです。

②即身仏信仰の信者の考察（10、11）

即身仏信仰のもうひとつの担い手である信じる側、農民の方を考えていきます。彼らの内的な精神面は、大いなるものに頼るということがまず挙げられます。世俗でも、農村内でも、信仰においても受動的な姿勢でした。それに彼らの生活自体も自然という大き

なものに規定された生活であり、彼らの運命は自然が握っていたのです。しかし、一方で、農民たちは生きるために非常に貪欲でした。その表れのひとつとして、飢饉のときに、身内を交換して食べたなどということも挙げられます。非常に現実的な精神的基盤を持っていたということができます。

その外的な社会状況を見ていくと、農村共同体の中での完結した生活が営まれ、先ほども言ったような、上から搾取され、自然に左右される不安定な生活でした。

今までの話を図で表したものが（スライド12、13）です。信じられる側の軸と、信じる側の軸があります。それぞれの軸の中での内的なものと外的なものの相互作用のうちで出てきた特徴というかエートスとして、一世行人を畏れ多い呪術（パワー）の持ち主であり、民衆に近い位置にいた存在ととらえ、農民を大きなものに左右される生活であるが、その生活、生きるために貪欲な面があるというようにとらえます。そして、ここに飢饉や政治不安という決定的に大きな影響を与える事件が生じました。そのことによって、一世行人の側から見ると衆生救済という契機が生まれ、農民の側には自分たちの力ではどうにもならない状況を、ものすごく呪術的な力を持った一世行人に、自分たちのために人柱として死んでもらうことで、救ってもらいたいという意識が生まれたと思います。またここに、お寺の経済的な理由として、多くの信仰を集めるためという面。さらに、羽黒山の天台宗に対抗するための真言宗アイデンティティ発露という要因もあり、ここに空海入定伝説に伴う弥勒信仰が微妙な形で絡んできたりします。以上のことを民衆にわかりやすいかたちで残すため、ミイラ化という現実に肉体が残るという形で、ものすごいパワーのシンボルとしての即身仏が求められました。上に挙げたようなさまざまな要因の相互作用、これらが集まったおかげで、ものすごい呪術力の持ち主と、それに頼る農民という基本構図の上に、山形の庄内地方において即身仏信仰が現れたのであると私たちは考えました。

（文責：鈴木昂太）

2. 現代への活かし方

これまでの部分では即身仏に関する見解を述べてきましたが、この章では即身仏の生というものを現代にどう活かしていくかについて述べたいと思います。

（1）生きる3要素（15～17）

前回の鶴岡における発表では暫定的な結論として、「即身仏に生を感じる」というところに至りました。生を感じるという結論に至ったのも、生きている人間と即身仏に共通点が見つかったからです。

私たちは即身仏の生を考えるときに京都ノートルダム女子大学人間文化学部の村田久行先生の「生きる3要素」という考え方を参考にしました。この考え方では人間は①時間存在②関係存在③自律存在という3つの要素によって生きるバランスをとっているとしています。①時間存在とは、未来があるということ、つまり、明日も生きているという前提があることを意味しています。②関係存在とは、他者と

の関係性の中に自分の存在を感じられること、つまり一人で生きているのではないという実感が持てることを示しています。③自律存在とは自己決定できること、自分の人生を自分で決めることができるということです。この要素のうち一つでも欠けると、人間は図のようにバランスを崩してしまいます。つまり、この３要素は生きていくために欠かせないということができます。

次にこれを即身仏に置き換えて考えてみました。①時間存在に関して、将来・未来を考えるにあたって、即身仏における未来とは飢餓を救うという意味です。つまり即身仏になることによって未来を生きることができると解釈することができます。②関係存在に関して、社会の人々の心に残るという点、また他者の中に自分の存在を見出すことができることから、即身仏にも関係存在を見出すことができます。③自律存在に関して、即身仏となった一世行人は自らの行動に対して自己決定していたと考えられます。以上より、即身仏にも生きる３要素というものが形を変えながらも当てはまることから、即身仏は客観的に見れば死であるが、その内面、精神面をみれば、即身仏になるということは生きることにつながっていたのではないかと私たちは考えました。そして、前回のセミナーでは即身仏に生を感じるという結論に至りました。　（文責:森　智也）

（2）ケアの必要性（18～25）

ｉ）はじめに

一般的に看護師、医師、介護師などを対人援助職といいますが、人がこの社会で生きていくには、必ず誰かと関わって生きていかなければなりません。「人は必ずどこかで誰かの対人援助（=care）をし、されている」ということから、「対人援助（＝ケア）」という視点から即身仏の生の現代への活かし方を考えることは有益だと考えます。

ⅱ）本論

①人間の存在は有限であること（19）

人間はそもそも有限な存在であり、人間全てが時間的に制限された存在、死に向かっていく生物であるといえます。そのことをドイツの哲学者であるハイデガーは著書『存在と時間』で人間のこの特性を「時間的存在」としています。そして、その時間的存在であることの究極の表れが「死」です。しかし、健康であるということ、つまりこの日常生活で私たちはこの「有限な存在である」という人間の本来性を忘れて、あるいは「死」という越えられない壁にぶつかることを意識的に、あるいは無意識的に避けつつ生きていることが多いと感じます。

②非本来的な生と本来的な生（20）

それでは、一般的に人は本来性＝有限な存在であることを忘れて、どのような本来的でないあり方（非本来的な生）をしているでしょうか。ハイデガーは

本来的な生を沈黙・内省・決意性と定義づけ、非本来的な生をそれと対比させるものとして空談・好奇心･曖昧性と定義しています。具体的に空談とは「おしゃべり」、好奇心とは「外的自己、および世界への関心」、曖昧性とは「決断と責任からの回避」としています。この言葉を考えると、私自身を含め、確かに、人はこのハイデガーのいう「非本来的なあり方をしている」方が多いような気がします。

③人間存在の本来性と現代人のこれから（21）

日本の2006年の統計をみると、老年人口（65歳以上）は20.8%と高齢者の割合は高く、これからも高齢社会は更に進みます。また悪性新生物（がん）が死因の第1位（30.4%）を占めている中で医療は発達し、延命治療が可能となっています。つまり、これからの社会を生きる私たちは、「老い・病・死」へと向き合わざるを得なくなっているといえるのではないでしょうか。それは先ほど言った、非本来的な生から本来的な生への移行を求められているといえます。その裏づけとして、精神科医であったキューブラー＝ロスの著書『死ぬ瞬間』に示されている「死に行く過程のチャート」には、終末期の患者が致命的な疾患を自覚してから、死に至るまでのプロセスを5段階にまとめたものがあります。これとハイデガーの本来的な人間存在への移行を組み合わせた（スライド22）を見てみると、本来的な生を生きるためには、人間が自己の有限性に目をそむけることなく、それを決意して、受け容れることで成立するということが分かります。

④即身仏と本来的な生（23）

更に言えることは、少し大げさかもしれませんが私たちが勉強してきた即身仏とは、正にこの移行を自らの意志で成し遂げた人であるということです。つまり、人間存在の究極の表れである時間的存在を自ら切ることで、即身仏は本来的な生を生きたと考えることが出来ます。逆に、「老い・病・死」にこれから直面していく私たちはこの時間的存在を切られる立場にあると考えられます。

ⅲ）まとめ（24、25）

ここまで論じてきたように、私たちはこれから益々増えるであろう「老い・病・死」に向かう自分や周囲の人々を、本来的な生へ導くことが大切です。全ての人が即身仏のように自分の力で受容できるわけではありません。よって、そこに「人と人の対人援助＝ケア」が必要であるということができます。

即身仏は今回、私たちに「人間は、死という究極の場に直面しても、最後は自らの決意を持って受容できる真に強い存在である」ということと、私たちがこれからの社会で「自分の人生を生きる」ということの見本、気付きを与えてくれたように思います。そして、以上のことを頭のどこかで理解し信じていれば、これからの私たちの1日1日の生き方、あり方は少し変わるような気がしています。

（文責：漆原万里子）

即身仏の「生」を活かす

3班

•漆原　万里子
•杉　祐実
•成澤　美貴
•佐藤　一広
•鈴木　昂太
•船山　博道
•森　智也

1

目次

- 1. 即身仏に関する理解
  - ①即身仏とは
  - ②即身仏が山形に多い理由（自然面・土中入定が多い理由）
  - ③理念と利害状況の社会学を利用した考察
- 2. 現代への活かし方
  - ①生きる3要素
  - ②ケアの必要性

2

即身仏とは？(1)

定義

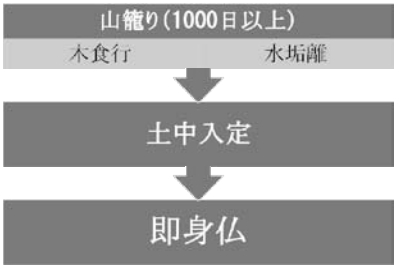
「生身のままで成仏した人。衆生救済のために自ら断食死してミイラ化した行者。」（広辞苑）

注連寺　鉄門海上人の即身仏

3

即身仏とは？(2)

～湯殿山系即身仏への過程（土中入定）～



4

即身仏が多く生まれた庄内の環境

5

なぜ土中入定という形式に至ったのか？

- 庄内地方の大自然を感じながら、大地と一体化する

6

・理念と利害状況の社会学

◆ ある社会現象、人間類型が生まれる時には、二つの極間における相互作用が起こっている

◆ 二つの極…内的―心理的な利害状況
外的―社会的な利害状況

7

一世行人（なる側）の考察（1）

・内的－心理的な利害関心
・荒行により精神の極みに達する
→肉体を滅却し、器としての自己
・湯殿山という聖山＝山中他界で修業
・霊験あらたかなものになる
＝大いなるものとの一体化
（大日如来、弥勒菩薩、自然）

ものすごいパワーを持つ精神の塊

8

一世行人（なる側）の考察（2）

・ 外的－社会的な利害状況
・家族や地位を捨てる（現世とのかかわりを捨てる）＋寺の中でも最下層の身分
・反羽黒山（反天台宗）
・厳しい戒律（修業に励むしかない）
・庶民に近い存在、社会貢献（橋の建設など）

死ぬための大義名分が立ちやすい

9

・即身仏信仰の信者（農民）の考察（1）

◆ 内的－心理的な利害関心
・大いなるものに頼る
（世俗権力、宗教権力、自然）
・生きるために貪欲である
・日常世界と宗教の分離

現実的な精神基盤

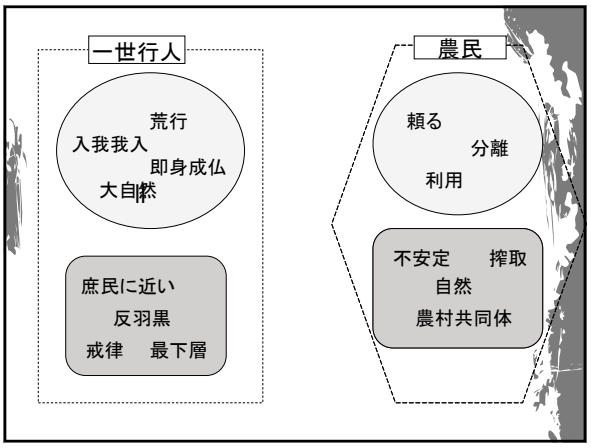
10

・即身仏信仰の信者（農民）の考察（2）

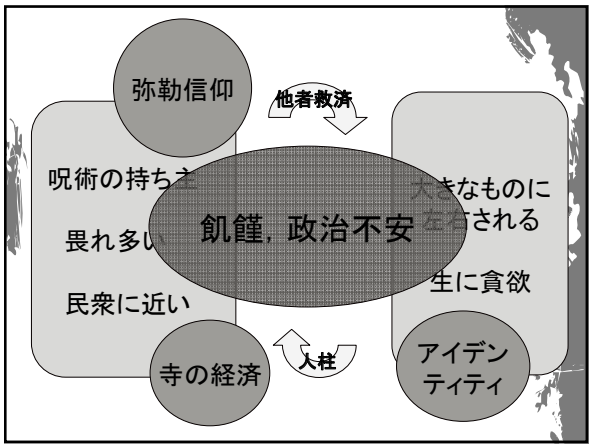
◆ 外的－社会的な利害状況
・農村共同体の中での生活
・搾取される存在
・自然と密着している

不安定な生活

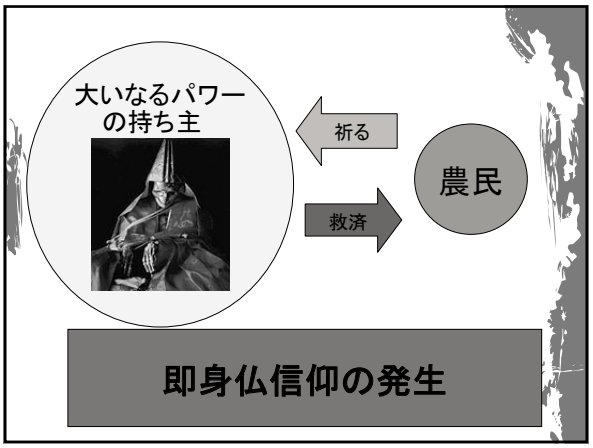
11



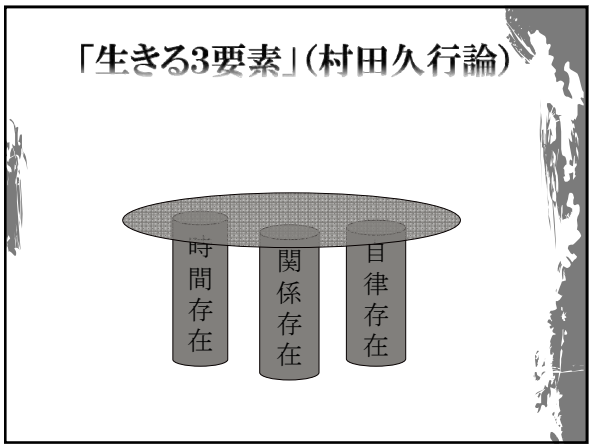
12



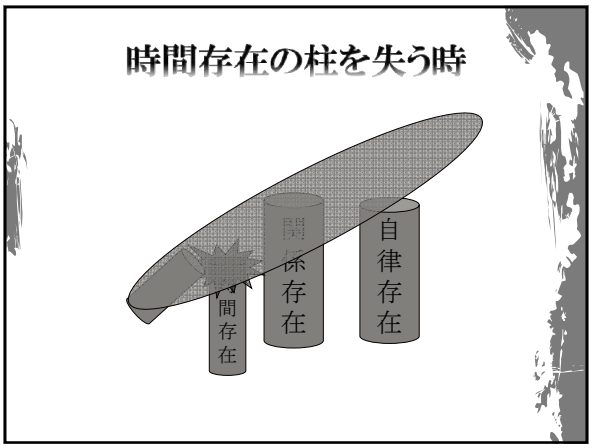
13



14



15



16

「生きる3要素」を即身仏にあてはめると…

①時間存在
　飢餓を救うこと→未来性
②関係存在
　他者の中に自分の存在を感じる
③自律存在
　自らの行動に対し自己決定

⇒即身仏に「生」を感じる

17

発表の前提となる考え

◆ 人は必ずどこかで
誰かの対人援助(＝ケア)をし、されている

18

人間の存在は有限であること

- 人間すべてが時間的存在である
⇒その究極のあらわれが「死」

- 人間の本来生＝「有限な存在」

19

非本来的な生と本来的な生の定義付け

- 非本来的な生⇔本来的な生

非本来的な生	本来的な生
空談（おしゃべり）	沈黙
好奇心(外的自己、世界への関心)	内省
曖昧性(決断、責任からの回避)	決意性

20

人間存在の本来性と現代人のこれから

- 高齢社会の進行、延命治療の発達、告知
⇒「老い・病・死」と向き合う社会へ

- 非本来的な生から本来的な生への移行

- 本来的な自己存在とは、自己の有限性に目を背けることなく、受け入れることで成立する

21

「死に行く過程のチャート」と本来的な自己存在への移行表

Stage of dying	非本来的な生			本来的な生		
	空談	好奇心	曖昧性	沈黙	内省	決意性
否認	○	○	○			
怒り	○	○	○			
取引		○	○	○	○	
抑鬱			○	○	○	
受容				○	○	○

22

即身仏と本来的な生のつながり

- 即身仏とは、時間的存在を自らの意志で切った

⇒本来的な移行を自ら成し遂げた

23

対人援助（ケア）がなぜ必要なのか

- 現代人は「老い・病・死」によって時間的存在を切られる立場にある
⇒本来的な生へ導くことが必要
⇒対人援助の必要性

24

即身仏が教えてくれたもの

- 人間は自ら決意を持って受容できる真に強い存在である
- 自らの人生を生きるということ

25

まとめ

- 鶴岡セミナーを通して

26

参考文献

- ・内藤正敏『鬼と修験のフォークロア』法政大学出版局（2007）
- 『広辞苑』第5版 岩波書店（1998）
- 内藤正敏『ミイラ信仰の研究』大和書房、（1974）
- 内藤 正敏著『日本のミイラ信仰』法藏館 (1999)
- 内藤正敏「藤沢周平の世界」朝日新聞社（2007）
- 松本昭『増補 日本のミイラ仏』臨川書店、（2002）
- 佐野 文哉，内藤 正敏著『日本の即身仏』光風社書店 (1969)
- 内藤 正敏著『ミイラ信仰の研究』大和書房 (1985)
- 日本ミイラ研究グループ 編『日本ミイラの研究』平凡社 (1969)
- マックス ヴェーバー著，大塚 久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店; 改訳版 (1989)
- 大塚 久雄著『社会科学における人間』岩波書店 (1977)
- 梅原 猛著『空海の思想について』講談社 (1980)
- 畠山弘著『湯殿山と即身仏』
- 松田義幸編集『出羽三山と日本人の精神文化』
- 村田久行著『ケアと思想と対人援助』川島書店（1988）
- 小澤竹俊、原敬著『臨床看護』第30巻、第7号（2004）

27

鶴岡セミナー活動報告会

武藤浩史（教養研究センター副所長／法学部教授）

2008年11月15日（土）14時から17時半まで、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペースにて、8月31日から9月3日まで開催された鶴岡セミナーの参加者により、活動報告会が行われました。学生参加者たちは、すでに鶴岡セミナーの最終日である9月3日に3つのグループに分かれて研究発表を行いましたが、その後、それぞれのグループは、さらに、e-mailや遠隔ビデオ通話プログラムを用いて、リサーチと議論を深め、この秋の日に最終的な研究成果を、公開プレゼンテーションという形で、80名近い一般聴衆の前で、披露しました。各グループ、20分の制限時間の中で熱のこもった発表を行いました。

来賓コメンテーターとして、財団法人致道博物館館長酒井忠久氏、同博物館常務理事酒井天美氏、出羽三山山岳宗教研究所主幹後藤赳司氏、財団法人簡易保険加入者協会財務部長中本佳孝氏、東北公益文科大学公益学部長大歳恒彦氏、同大学同学部准教授白迎玖氏にご臨席いただき、来賓として、鶴岡市企画部企画調整課長補佐高坂信司氏と鶴岡市東京事務所係長阿部知弘氏にご臨席いただきました。

報告会は、主催した慶應義塾大学教養研究センター所長横山千晶の挨拶で始まり、それに続く鶴岡市高坂氏の来賓挨拶の後で、プロジェクトリーダーの慶應義塾大学経済学部教授羽田功の鶴岡セミナー活動紹介があり、そして、3つのグループに分かれた鶴岡セミナー学生参加者の発表・質疑応答がありました。

第1グループ（8名）の発表は、「庄内で感じる生と死―死がもたらすエネルギー―」と題するもので、即身仏と現代の自殺の関係や松例祭と食物連鎖の問題を考察し、死の持つ二面性について触れて、まとめとしました。第2グループ（7名）の発表は、「鶴岡に学ぶ生命―自然の中にみる、いのちのかたち」と題され、公益、死生観、自然という3要素間の調和とバランスの中に、いのちの意味と意義を探りました。第3グループ（7名）は、「即身仏の『生』を活かす」と題する発表で、即身仏を概説した後、その意味を理念と利害の社会学を用いて考察し、また、即身仏の強さに、生の3要素（時間存在、関係存在、自立存在）の観点から、そして、本来的生をめざすべきケアという点から、考察を加えました。各発表に対して、平均5つの質問・コメントがあり、熱気あふれる質疑応答がそれぞれの発表に続いて20分間、友好的かつ緊迫した雰囲気の中で展開されました。そして、最後に各来賓コメンテーターと慶應義塾大学理工学部教授小菅隼人より励ましに満ちた啓発的なコメントを賜り、鶴岡セミナー活動報告会は、盛況のうちに幕を閉じました。

2008 年度「鶴岡セミナー」報告書

資料編

資料１　慶應義塾大学教養研究センター

「鶴岡セミナー」

＜参加者募集＞

『鶴岡に学ぶ「生命」－心と体と頭と－』

鶴岡・庄内の歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様など、「生命」を総合的に考えることを目的としたセミナーです。このセミナーは合宿企画と、一般公開企画があります。詳しくは下記のURLをご覧ください。

http://www.keio-up.net/trokseminar/

鶴岡セミナー開催期間　2008年　8月31日（日）～ 9月3日（水）

セミナープログラム

8月31日　「土の土方」オープニング（常設）

＜特別企画＞　命の実感プログラム

土の土方と水滴の時間

土の土方像の上に、昼夜一定間隔で水滴を落とし続けます。
生と死を圧縮した異質な時間を体験してみませんか。
詳細はURLをご覧ください。

基調講演・ディスカッション

＜公開企画①＞　講演　15:00～17:40

●「土　－生命（いのち）育むもの－」
講師：辻孝二郎（INAXライブミュージアム　土・どろんこ館　館長）

●「鶴岡－生命の小宇宙」（仮題）
講師：小松隆二（東北公益文科大学　教授）

●「知る・見る・書く－行動の教養学入門」（仮題）
講師：坂上弘（作家・日本文藝家協会理事長）

会場：東北公益文科大学大学院ホール
（鶴岡タウンキャンパス内）

9月1日・2日　合宿参加者対象の講義

9月3日　合宿参加者によるプレゼンテーション

＜公開企画②＞　講演　12:00～12:40

●「土方翼と衰弱する生」
講師：森下睦（慶應義塾大学アートセンター）
会場：東北公益文科大学大学院ホール
（鶴岡タウンキャンパス内）

〈　プレ企画　〉
映画上映と講演会

7月30日（水）
14:20～16:30
●映画「蝉しぐれ」上映会
16:45～18:00
●講演会
講演者：宇生雅明　（映画「蝉しぐれ」プロデューサー）
テーマ：「山形庄内地方の魅力と庄内映画村の活動」
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎

〈　セミナー合宿参加者募集　〉

合宿に参加希望の方は上記のURLをご覧ください。

申込締切：慶應義塾大学学生　7月17日（木）
その他の方　7月25日（金）

〈　一般公開企画参加者募集　〉

募集対象	どなたでもご参加いただけます。
入場料	無料
募集定員	各企画70名程度（先着順）
申込方法	ご希望の企画番号、氏名、郵便番号、住所、電話番号、年齢を明記のうえ、E-mailもしくはFAXでお申し込みください。（企画に複数参加することも可能です。）

問い合わせ先：慶應義塾大学日吉キャンパス　教養研究センター事務局
電話：045-566-1151　FAX：045-566-1102　E-mail：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

資料１：鶴岡セミナー　参加者募集ポスター

資料２：鶴岡セミナー特別企画「土の土方と水滴の時間」ポスター

ReCLA　*教養研究センター　鶴岡セミナー・プレ企画*　資料３

映画「蝉しぐれ」上映会と

映画「蝉しぐれ」プロデューサー

宇生雅明氏講演会

日時　：　2008年7月30日（水）　14:20－18:00

場所　：　慶應義塾大学　日吉キャンパス
来往舎1階　シンポジウムスペース

入場無料

第一部　14:20－16:30　**映画「蝉しぐれ」上映会**

第二部　16:45－18:00　**講演会**

講演者：宇生雅明氏（映画「蝉しぐれ」プロデューサー）

テーマ：「山形庄内地方の魅力と庄内映画村の活動」

慶應義塾大学教養研究センター 鶴岡セミナー事務局
〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1　TEL.045-566-1151（代表）　FAX:045-566-1102　E-mail：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

資料３：鶴岡セミナー「プレ企画」ポスター

資料４　慶應義塾大学教養研究センター

鶴岡に学ぶ「生命（いのち）」－
心と体と頭と

プロジェクトリーダー　経済学部　羽田　功

～死を想い、生きることを体感した参加学生とコメンテーターによる報告会～

山形県鶴岡・荘内の歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、慶應義塾において進められている「生命」に関わる多様な研究・教育の成果も取り入れることで、「生命」を総合的に考えることを目的とした**鶴岡セミナーは今夏、8月31日～9月3日の期間、鶴岡タウンキャンパスを中心に開催されました。**

このセミナーには塾生だけではなく、地元・東北公益文科大学の学生も参加し、多彩な講師による講義と、即身仏を安置した寺院などを巡るフィールドワークを行いました。今回の報告会は、死を想い、生きることを体感した参加学生とコメンテーターによる報告会です。

【報告会プログラム】

日時：**2008年11月15日（土）14:00～17:30**

場所：**慶應義塾大学日吉キャンパス**
来往舎1Fシンポジウムスペース

14:00　開会
14:45　参加学生によるプレゼンテーション
17:30　閉会

鶴岡セミナーとは

テーマ

総合テーマ：「鶴岡に学ぶ「生命」－心と体と頭と－」
鶴岡・荘内の歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、先端生命科学研究所を中心に慶應義塾において進められている「生命」に関わる最先端の研究・教育の成果も取り入れた、「生命」を総合的に考えることを目的とする。

2008年度テーマ
基調テーマ：「知る・見る・表現する－行動の教養学入門」
年度テーマ：「生命の源－死を想い、生きることを考える」
特別プログラム・テーマ：命の実感プログラム：土の土方と水滴の時間」

実施概要
期間：2008年8月31日～9月3日（3泊4日）
場所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス・東北公益文科大学大学院ホール
鶴岡市・出羽三山
参加者：慶應義塾大学学部生12名（法学部4名・経済学部1名・文学部5名
医学部1名・看護医療学部1名）、東北公益文科大学学部生7名、
東北公益文科大学大学院生2名、一般参加（慶應義塾大学卒業生）1名
主催：慶應義塾大学教養研究センター
後援：鶴岡市、鶴岡市教育委員会
協力：株式会社ウィルコム
ＩＮＡＸライブミュージアム「土・どろんこ館」
株式会社テレサポート・東北公益文科大学
慶應義塾大学アートセンター
慶應義塾大学デジタルメディアコンテンツ統合研究機構(DMC)
慶應義塾大学出版会

鶴岡
セミナー
活動報告会

入場自由・事前申込み不要

問合せ先：鶴岡セミナー事務局（教養研究センター）　tel：045-566-1151　e-mail：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
鶴岡セミナーHP：http://www.keio-up.net/trokseminar/　共催：HRP2008運営委員会

資料４：鶴岡セミナー「活動報告会」ポスター

2008年8月8日 | 荘内日報 | 2面

鶴岡セミナー初開講

慶應大1―2年生

「生命の源」テーマに

31日から来月3日 一般公開企画への参加募集

慶應義塾大教養研究センターが教養課程の1―2年生の希望者を対象に、鶴岡市の鶴岡タウンキャンパスなどで31日から9月3日までの3泊4日の日程で、「鶴岡セミナー」を開講することになった。日常とは異なる環境の中に身を置き、学生たちの学びの場を広げようというもので、来年度からの本格実施の前段となる。初のセミナー開催に合わせ、初日の基調講演と最終日のセミナー参加者によるプレゼンテーションを一般公開する。

教養課程のカリキュラムを練る同センターが、未知のものに出会うことで学生たちに「学び」のフィールドを広げてほしいと企画した。総合テーマは「鶴岡に学ぶ『生命（いのち）』―心と体と頭と」。セミナーの目的について同センターは「日本海、庄内平野、出羽三山など豊かな自然と文化、歴史に恵まれた鶴岡キャンパスで、存分に心と体と頭を使い尽くすプログラムを体験する」としている。

同大鶴岡タウンキャンパス事務室は「教養課程の学生に、日常から離れて『生命』というものをあらためて考えてもらおうというのが狙い。そのため、首都圏以外にある唯一のキャンパスとして鶴岡がセミナー開催場所に選ばれた」と説明する。来年度以降のセミナー本格実施に合わせ、教養課程のある同大日吉キャンパスで、鶴岡の食材を学食に提供したり物産展を開催したりなど、鶴岡を学生に紹介する「鶴岡ウイーク」の開催構想もあるという。

初の鶴岡セミナーには同大の学生12人と東北公益文科大の学生・大学院生ら計22人が参加する。本年度のテーマは「生命の源―死を想（おも）い、生きることを考える」に設定。羽黒山や注連寺の即身仏などを見学し、写真家で東北芸術工科大教授の内藤正敏さんの講義を受ける。

また、セミナーの特別企画として、舞踏家の故・土方巽さんの像を土と泥で造り鶴岡タウンキャンパス内に設置し、水滴を落とし続けて像が崩れていく様子を撮影、送信するプログラムも行う。鶴岡を舞台にして日本人の死生観を探り、現代に生きることの意味を世界に発信する教育・研究上の試みという。

来年度以降の鶴岡セミナーの年度別テーマ例として、「出羽三山と山岳信仰」「致道館の学び」「荘内の文学・芸術」などが検討されている。

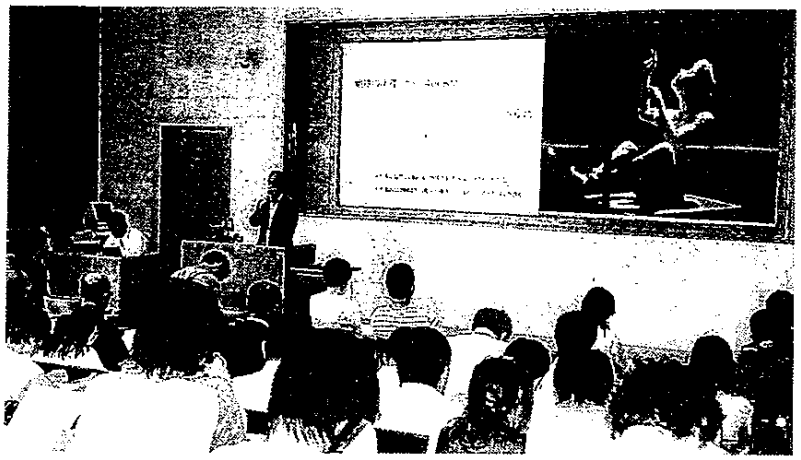
一般公開企画は、初日の31日が午後2時半から。前東北公益大学長の小松隆一さんが「鶴岡―生命の小宇宙」（仮題）、作家で日本文芸家協会理事長の坂上弘さんが「知る・見る・書く―行動の教養学入門」（仮題）のテーマでそれぞれ基調講演する。

最終日の9月3日の公開プレゼンテーションは午前10時から。会場はいずれも鶴岡の東北公益大大学院ホールで、入場無料。それぞれ先着70人を受け付ける。

問い合わせ、申し込みは慶應義塾大教養研究センター鶴岡セミナー事務局＝電045（566）1151＝か、同大鶴岡タウンキャンパス事務室＝電0235（29）0800＝へ。締め切りは今月20日。

2008年9月2日	荘内日報	2面

鶴岡に学ぶ「生命」は



鶴岡セミナーが開講され、初日の基調講演が一般公開された

多彩にセミナー開催

慶應大一般公開

慶應義塾大教養課程の1―2年生らを対象にした「鶴岡セミナー」が31日から9月3日の日程で、鶴岡タウンキャンパスなどで開講されている。

教育課程のカリキュラムを練る同大教養研究センターが、未知のものに出会うことで学生たちに「学び」のフィールドを広げてほしいと、希望学生を対象に今回初めて企画した。総合テーマは「鶴岡に学ぶ『生命(いのち)』―心と体と頭と」。

セミナーには同大の学生12人と東北公益文科大の学生・大学院生ら計22人が参加。羽黒山や注連寺の即身仏などの見学、写真家で東北芸術工科大教授の内藤正敏さんの講義、特別企画として、舞踏家の故・土方巽さんの像を土と泥で造って鶴岡タウンキャンパス内に設置し、水滴を落とし続けて像が崩れていく様子を撮影、送信するプログラムなどが行われる。

初日の31日は一般公開企画として、INAXライブミュージアム土・どろんこ館館長の辻孝二郎さんが「土―生命育むもの(いのちはぐくむもの)―」、前公益大学長の小松隆二さんが「鶴岡・酒田―公益の小宇宙」、作家で日本文芸家協会理事長の坂上弘さんが「知る・見る・書く―行動の教養学入門」のテーマでそれぞれ基調講演した。

このうち、辻さんは講演の中で「土ができるのはほぼ100年で1センチ。土はどんな科学技術でも作ることができず、自然の循環でしかできない。水や空気、養分を蓄え微生物を育てる。土から生命の循環が始まり、土なしでは生命の維持は難しい」と話した。最終日は、公益大大学院ホールで公開プレゼンテーションが行われる。

2008年9月4日	山形新聞	16面

鶴岡で学んだ「生と死」発表

慶応大生ら

慶応大教養研究センター主催の「鶴岡セミナー」参加者による発表会が三日、鶴岡市の東北公益文科大大学院ホールで開かれ、学生らがフィールドワークを通じて考えた「生と死」に関することを披露しあった。

セミナーには慶応大の学生や卒業生のほか、東北公益文科大大学院の学生など二十二人が参加。

「鶴岡に学ぶ『生命(いのち)』―心と体と頭と」をテーマに、先月三十一日から今月三日までの四日間、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた鶴岡市を舞台にフィールドワークし、羽黒山や湯殿山を巡って生命と自然のかかわりなどについて考察した。

発表会には約百人が出席。富塚陽一鶴岡市長、黒田昌裕東北公益文科大学長、坂上弘日本文芸家協会理事長ら五人をコメンテーターに、三グループに分かれ発表した。学生らは注連寺で即身仏を見た時の驚きや、羽黒山の石段を登るつらさなどから「生きている実感」を得たことなどに触れた。このうち、あるグループは「羽黒山は杉を植え、石段を作った人工の

成果発表を真剣な表情で聞く参加者ら　＝鶴岡市

2008年9月5日	荘内日報	7面

庄内の死生観に感動

慶應大公益大　学生がセミナー成果を発表

慶應義塾大教養研究センターによる鶴岡セミナーの公開プレゼンテーションが3日、鶴岡市の東北公益文科大大学院ホールで開かれ、セミナーに参加した慶應大や公益大の学生らが、3泊4日のセミナーで学んだ成果を発表した。

教養課程のカリキュラムを練る同センターが、未知のものに出会うことで学生たちに「学び」のフィールドを広げてほしいと、鶴岡セミナーを初めて企画。「鶴岡に学ぶ『生命（いのち）』―心と体と頭と」が総合テーマで、慶應大の学生12人と公益大の学生・大学院生ら計22人が参加。先月31日から3日までの日程で、羽黒山の石段登りや注連寺の即身仏見学、写真家で東北芸術工科大教授の内藤正敏さんの講義を受けるなどした。

公開プレゼンテーションは、参加者が鶴岡で学んだことをまとめ、報告する場として開かれ、一般を含め約90人が出席。セミナー参加者が3つのグループに分かれ、「庄内で感じる生と死―死がもたらすエネルギー」「鶴岡に学ぶ生命―自然の中に見るいのちの形」「即身仏の『生』を感じる」のテーマで発表し、一般の出席者や公益大の教官らと質疑に臨み、富塚陽一市長や致道博物館の酒井天美常務理事、作家で日本文芸家協会理事長の坂上弘氏らがコメントした。

慶應大の学生たちは「死の象徴でもある即身仏を目の当たりにして、死ですべてが終るのではなく、次の生へとつながることを感じた」「命は自然の中で生かされ、自然とともに生きていることを実感した」「家で勉強するだけでは体感できない多くのことを感じ、このセミナーで自分が変わったと思う」など感想。今回のプレゼンテーションをもとに11月には慶應大日吉キャンパスでセミナーの成果報告会が予定されており、学生たちは「庄内を訪れたことのない東京の人々に、庄内に根付く死生観をどう伝えるか、頭を悩ませる」と話していた。

慶應大は、教養課程の1―2年生を中心とした鶴岡セミナーを来年度から本格実施する方針で、来年度以降の年度別テーマとして、「出羽三山と山岳信仰」「致道博の学び」「荘内の文学・芸術」などを検討している。

慶應大が初めて開いた鶴岡セミナー参加者による公開プレゼンテーション

こんにちは 鶴岡 33

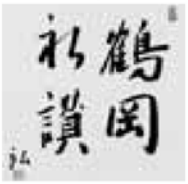
坂上弘さん

作家。日本文藝家協会理事長。慶應義塾評議員。大学在学中から小説を執筆し、会社員としての経験を糧としながら『田園風景』『近くて遠い旅』等の現代小説を多数発表している。今回はセミナー講師のため来鶴。東京都出身。

鶴岡を訪れたのは初めてです。今回、東北公益文科大学と慶應義塾大学の学生が一緒に一つのテーマに取り組む「鶴岡セミナー」という初めての企画が行われ、私も講師として参加し、学生さんと一緒に羽黒山や注連寺などを回りました。決して鶴岡のすべてを見たわけではありませんが、鶴岡の人と接したとき随所に感じたことは、鶴岡の人の「ありがとう」という言葉がとてもしっかりとしていることです。本当に心からおっしゃっていて、お金など抜きで心を交わす精神がある街だなと感じました。

私は、会社勤めをしながら小説を書き続け、いわゆる二足のわらじを履いてきました。私が小説を書き始めたころは、筆一本で食べていくことが難しい時代だったんです。ちょうど高度経済成長の時代で仕事も忙しく、書くことと働くことの両立は大変でしたね。しかし、仕事を通じてたくさんの人に出会い、いろいろな人の考えを知ることができました。小説を書くことは、一つの見方だけでなく他者を考える、愛するということが大切です。実社会でそれができなくて、小説だけいいものを書こうとしてもなかなかできません。だから今は、二足のわらじというものを恐れずに履いて、いろんな広がりを持った人間として小説を書いてきてよかったと思っています。

今の学生さんは、情報化が進んだせいか、資料もコンピュータに頼ることが多いと思うんです。今回のセミナーで感じたことは、実際に自分の足で歩き、体験した中からイマジネーションを受け、考え、そして行動することの大切さです。さらに、地元の学生だけでなく、他所から来た学生と一緒に行動することで、そこからまったく新しい刺激や感受性がもたらされます。今回それに皆さん気付いてくれた。地元の方と他所から来た人がお互いに刺激し合い、それが新しい力になっていく。鶴岡って、そういうことが雄大で、文化的な深さがすごくある所だと思います。



鶴岡市「広報つるおか」2008年10月1日号

新しい教養教育の試み

坂上（さかがみ） 弘（ひろし）
（作家、慶應義塾大学出版会会長・塾員）

日吉キャンパスにある教養研究センターが鶴岡セミナーとよぶ企画を立ち上げて、九月に初の鶴岡市内での合宿を行い、参加した二十二名の学生たちの発表会が十一月に日吉で行われた。

教養研究センターは、義塾の教養教育のプログラムをつくっているのではないか、と思われるだろうが、そうではない。

教養を培うのが、大学の目的だが、教養力を自他が共生する行動力として身につけるのは、簡単なことではない。とくに、いまの学生たちには。

そこで、教養をいろいろな角度からとらえて、教育や学習にどう活かしていくか、そのモデルをつくって実験しているのが、教養研究センターである。

この研究は、「学術フロンティア」として行われてきたが、教員が学部横断、しかもボランティア・ベース、プロジェクト・ベースですすめられてきた。この結果、教員間の連携、コミュニケーションが活発になり、キャンパス全体の教員の力と熱気があふれている。こうして、教員、職員、学生が一つのコミュニティとして機能するような学びの場でありたいというのが願いである。

鶴岡プログラムとは、こうした教養研究の実験の一つだが、外に飛び出して行くところが義塾らしい。

さて、そのプログラムに私も講師として参加して、とても感銘をうけた。まず、グループ構成がおもしろい。慶應で募集した学部生、今年から二代目として新学長に黒田昌裕名誉教授がなられた東北公益文科大学の学生、そして地元鶴岡市の社会人大学院生らが一体となって合宿した。合宿所として老舗の民宿月山荘をえらんだ。

基本テーマは教養研究センターが一貫してかかげてきた〝「生命」を学ぶ〟で、今回は、修験道と即身仏が選ばれた。生命と死が手に取るようにわかる日本人の身体知について、東北芸術工科大学の内藤正敏教授に講義を依頼して快諾をえた。内藤さんは何十年も写真家として鶴岡に入り込み、自ら修験をやり、日本人の生命観に取り組んでこられた民俗学者である。二十二名の学生をつれて、即身仏の祭られた寺などのフィールドワークをして、夜は学生たちと寝起きしてくださった。頭がさがる思いがした。

鶴岡は、庄内平野、鳥海山、月山、羽黒山、湯殿山がひとつのサイクルとなって命を育む歴史的有機体である。そこに慶應の先端生命科学研究所と東北公益文科大学大学院のキャンパスがあり、富塚市長と市役所の職員に加えて、地元の三田会の熱心な支援がえられた。公益文科大学の初代学長の小松隆二名誉教授は、公共政策の大家で、庄内の公益も研究しておられ、日本の公益というコンセプトで庄内を紹介された。

学生たちが自ら足で学んだ成果は十一月の十五日に発表された。私はその内容の豊かさに驚いた。グループ1のまとめは、即身仏の「生」を感じる、で、肉体は滅びても、現在ひとびとの間で影響をあたえているのは、他者の中に自分を存在させる、ということで、即身仏から、生きる姿を感得する、という。グループ2は、衆生救済のために断食死した行者に焦点を、グループ3は、生命を考えるにあたって、足であるいた体験から、羽黒山の修験道から、二十一世紀の公益の時代へとするまとめをした。

この新しいこころみである鶴岡セミナーには、教養が、人々の営み、行動だという考えが、一貫している。教養というものがあるのではなく、人の体の中で、文明のように、息づき発達しつづけていること。教養する、ということが、生きることと直結していることは、独立自尊の精神そのものである。

プログラムをデザインした一人である羽田功経済学部教授によると、近年の学生の最大の悩みは、人とのコミュニケーションだという。学生たち自らが受身であることをブレイクするのが目的で、鶴岡の風土、歴史、社会を体得してもらい、それを自己表現へとうながす。自分で表現するという〝身体知〟が、他者との共生をはぐくむ。

この鶴岡セミナーは、来年に向けて、あたらしいテーマが用意されている。今後は、運営上のことで、規模や、継続性の課題がのこるが、創立一五〇年を機にはじまった教養教育に大いに期待したい。

『三田評論』2008年12月号

鶴岡セミナー協力団体・個人

【団体】（順不同）
鶴岡市
鶴岡市教育委員会
東北公益文科大学・大学院
株式会社ウィルコム
INAX ライブミュージアム「土・どろんこ館」
株式会社テレサポート
鶴岡三田会
酒田三田会
慶應義塾大学アートセンター
慶應義塾大学デジタルメディアコンテンツ統合研究機構（DMC）
慶應義塾大学出版会
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス

【個人】（順不同）
富塚陽一（鶴岡市長）
酒井忠久（財団法人致道博物館　館長）
酒井天美（財団法人致道博物館　常務理事）
内藤正敏（東北芸術工科大学　教授）
黒田昌裕（東北公益文科大学　学長）
小松隆二（東北公益文科大学　教授）
辻　孝二郎（INAX ライブミュージアム「土・どろんこ館」館長）
坂上　弘（作家・日本文芸家協会理事長）
後藤赳司（出羽三山山岳宗教研究所　主幹）
宇生雅明（庄内映画村株式会社　代表取締役社長）
中本佳孝（財団法人簡易保険加入者協会　財務部長）
笹原桂一（鶴岡ガス株式会社　代表取締役会長）
早坂　剛（鶴岡商工会議所会頭、株式会社　エル・サン代表取締役社長）
高坂信司（鶴岡市企画部企画調整課長補佐）
阿部知弘（鶴岡市東京事務所　係長）
五十嵐泰彦（鶴岡三田会）
菊池武彦（酒田三田会）
大歳恒彦（東北公益文科大学　学部長・研究科長）
間瀬啓允（東北公益文科大学　教授）
白　迎玖（東北公益文科大学　准教授）
森下　隆（慶應義塾大学アートセンター　訪問所員）

スタッフ

羽田　功（経済学部）	プロジェクト・リーダー
横山千晶（法学部）	教養研究センター所長
武藤浩史（法学部）	
小菅隼人（理工学部）	特別企画「土の土方」責任者
長田　進（経済学部）	
小磯勝人（慶應義塾大学出版会）	記録
日水邦昭（教養研究センター）	事務局

謝　辞　―あとがきに代えて―

鶴岡セミナー・プロジェクトリーダー
羽田　功（経済学部教授）

第一回鶴岡セミナーについてご報告してまいりました。手前味噌になりますが、幸いにして全体としては成功裡にセミナーを終えることができました。鶴岡や庄内の方々にも喜んでいただけたようですし、山形新聞や庄内日報にも取り上げていただけました(資料編を参照)。一方、横浜・日吉キャンパスでのプレ企画や活動報告会にも多くの参加者があったことは、鶴岡セミナーが幅広い関心を呼び起こしたことの証左でもあります。これを出発点として、鶴岡セミナーをより充実したものに発展させたいと考えております。

さて、今回の鶴岡セミナー開催にあたってはほんとうに多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。まず、セミナーの企画を立ち上げた当初から一貫して私たちの準備に伴走してくださった鶴岡市長の富塚陽一氏をはじめとする鶴岡市役所、鶴岡市教育委員会の皆さまに感謝したいと思います。特に打ち合わせを含めたセミナーのほぼ全期間に渡って私たちにお付き合いくださった鶴岡市役所企画部企画調整課の高坂信司氏には一方ならぬお世話になりました。ありがとうございました。

次に、セミナーを通じて地元の若い方々との交流の機会を持ちたいという私たちの希望に応えて、東北公益文科大学の学生や大学院生に対してセミナーへの積極的な参加を呼びかけるばかりでなく、参加に際してさまざまな形で便宜をはかってくださった同大学の黒田昌裕学長、小松隆二前学長、大歳恒彦公益学部長、白迎玖准教授をはじめとする教職員の方々に心よりお礼を申し上げます。すばらしい学生さんたちでした。

また、合宿セミナーのフィールド・アクティヴィティやプレゼンテーションのために機材の提供や情報環境の整備をしてくださった株式会社ウィルコム、特別企画「命の実感プログラム：土の土方と水滴の時間」の実施にあたって土方像作成のための土の無償提供や全面的な技術的サポートをしてくださった株式会社 INAX、同じく土方像崩壊の過程を庄内ライブカメラを通じてリアルタイムで放映してくださった株式会社テレサポート社長の鈴木良廣氏にも感謝いたします。さらには、物心両面で私たちを支えてくださった慶應義塾卒業生の同窓会組織である鶴岡三田会、酒田三田会にもお礼を申し上げます。

もちろん、すでに本文中にお名前を挙げさせていただいておりますが、セッションⅠ講師の先生方あるいは学生たちのプレゼンテーションに対するアドバイスやコメントを賜ったコメンテーターの方々のご協力がなければセミナー自体が成立しなかったことは言うまでもありません。あらためて感謝申し上げます。と同時に、一般公開した講演やプレゼンテーションに多数の市民の方々のご参加があったことは私たちセミナー関係者や学生たちにとってとても大きな励みとなりました。ありがとうございました。

最後になりましたが、私たちが何よりも感謝したいのは、限られた時間の中で「心と体と頭」を目一杯に使って見、聞き、調べ、考え、議論し、まとめ、発表にまでこぎつけてくれた合宿セミナーの参加者たちです。少し大げさかもしれませんが、彼らの頑張りがなければセミナーの開催は意味がなかったとさえ言えるかもしれません。セミナーを作り上げ、成功に導いてくれたのは彼らの存在にほかなりません。彼らには、ぜひともこの力と経験を次のセミナー参加者へ伝えていってほしいと思います。

皆さま、ほんとうにありがとうございました。そして、鶴岡セミナーへのよりいっそうのご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

慶應義塾大学教養研究センター
2008 年度「鶴岡セミナー」報告書

2009 年 2 月 10 日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　横山千晶

〒 223-8521　横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL　045-563-1111（代表）
Email　lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

©2009 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。